しからざるが如し、茲行に臨んで上引見して寶劍を賜ひ曰く、李鎰以下命を用ゐざる者は此の劍を用ゐよ、と辭して出で又た賓廳に語て大臣に見へ將に階を下らんとす、時に頭上の沙帽忽ち地上に落つ、見者色を失ふ、龍仁に到て事を啓す、狀中其の名を署せず人、或は其の心の亂るゝ事あらんを疑ふ」

慶尙の右兵使金誠一を逮へて獄に下す未だ至らざるにまた以て招諭使と爲し咸安郡の守柳崇仁を以て兵使と爲す初め誠一尙州に到り賊己に境を犯すと聞き晝夜兼行本營に馳せ赴く曹大坤と路中に遇ふ約節を交はす時に賊己に金海を陷れ右道の諸邑を分掠す誠一進賊と遇ふ將士走らんと欲す誠一馬より下り胡床に踞して動かず軍官李宗仁を呼んで曰く汝は勇士なり賊を見ずして先づ退くと一賊金假面を著くるものあり及を揮つて突進す宗仁馳せ出てゝ一箭迎へ射て殪す諸賊却き走り敢て前まんとせず誠一離散せる者を收召して郡縣に移檄し以て牽綴の計を爲す上誠一が前に日本に使者となつて行き賊未だ容易に至らずと言ひ人心を解き國事を誤りしを以て義禁府の都事を遣して拿へ來らしむ事未だ測るべからず監



司金睟誠一の逮へらるゝを聞き出でゝ路上に別れを告ぐ誠一の辭氣慷慨而も一語の己が事に及ぶ無く唯だ睟に言ふに力を盡して賊を討つを以て す老吏河自溶歎じて曰く已が死を惜まずして惟國事是れ憂ふ忠臣なるかな と誠一行きて稷山に至る上怒霽れ且誠一が本道士民の心を得たるを知ほし召して命じて其の罪を赦して右道の招諭使と爲し道內の人民を諭して兵を起して賊を討らしむ、時に柳宗仁戰功あり故に以て兵使に拜し僉知金功を以て慶尙左道の安集使となす、時に監使金睟右道に在り而るに賊中路を橫貫したるゆへに左道と聲聞通せずなれり守令皆官を捨てゝ逃走し民心解散す朝廷之を聞き金功は榮川の人にして群に本道の民情を知るゆへに彼をして本道の民を安集せしむべしとなし之を遣はす功既にして至る左道の民始めて朝廷の命を聞き知つて稍く還り集る榮川豐基の二邑は賊幸に至らずして義兵頗る起ると云ふ賊尙州を陷る巡邊使李鎰の兵敗れて忠州に奔せ還る初め慶尙道の巡察使金睟賊の變を聞き卽ち方略に依て軍を分ち列邑に移文す各々所屬を率き信知に屯聚して以て京將の至るを

待つ間慶以下守令皆其軍を引いて大丘に赴き川邊に露次つて巡邊使を待つ。既數日を經て巡邊使未來るに及ばざるに賊漸く近き衆軍自ら相驚動す會々大雨ありて衣裝沾濕して粮餉繼かず夜中皆潰散す守令の如きは悉く單騎を以て奔還る巡邊使間慶に入るに縣中已に空しくて一人をも見ず自ら倉穀を發き率ゆる所の人々に與へ而して咸昌を經て尙州に至る牧使金溂託巡邊使を出站に支待するを以て遁れて山中に入る獨り判官權吉邑を守る鎰は兵なきを以て吉を責め庭に曳き出て之れを斬らんと欲す吉哀告して自ら出てゝ兵を集んことを願ふ夜に達して村落の間を搜索す詰朝數百人を得て以て至る皆農民なり鎰尙州に留つて一日倉を發き糶を開き散民を誘ひ出す散民山谷の中より介々として來る者又數百餘人倉卒伍を編成して軍となしたるも一人として戰に堪ゆる者なし時に賊已に善山に至る日暮れて開寧縣の人あり來つて賊の近けることを報ず鎰之れ衆を惑はすものなりとしてその者を斬らんとす其の者呼んで曰く願くは姑らく我を囚へ置け明早朝にして賊未だ至らざるとき我を殺すも晚からざるなり



と是の夜賊兵長川に屯して尙州を距ること二十里なり而かも鎰の軍に斥候無きが故に賊來れども知らず翌朝鎰猶賊無しとして開寧の人を獄より出して斬つて以て衆に示す得る所の民軍を率ひて京より來れる將士合せたれども僅かに八九百なりき陣を州北の川邊に習ひ山に依て陣と爲し陣中に大將旗を立つ鎰甲を被り馬を大旗の下に立つ從軍官の尹遲朴筦判官權吉沙斤察訪金宗武等皆馬を下つて鎰か馬後に在り暫らく有つて數人の者林木の間を出てゝ徘徊し眺望して回る衆その賊なるを疑へども開寧の人に懲りて敢へて告げず既にして又城中數箇處に烟の起るを望見す鎰始めて軍官一人を使はして往つて探らしむ軍官馬に跨つて行くこと二驛卒轡を執り緩々として去る倭先つ橋下に伏して鳥銃を以て軍官を射る馬より墜して首を斬つて去る我軍望見して氣を奪はる俄然賊大に至り鳥銃十餘を以て之を衝く中る者卽ち斃る鎰急ぎ軍人を呼んで射を發す矢は數十歩の內に墜ちて賊を傷くる能はず賊已に分れて左右翼を出で旗幟を持して軍後を繞り圍扼して來る鎰事の急なるを知つて馬を回して北に向ひ軍

を走らして大に亂る各自ら命を逃れんとしたれども脱るゝを得たる者幾も無し從事以下未だ馬に上るに及ばざるもの悉く賊の爲に害せらる賊鎰を追ふこと急なり鎰馬を棄て衣服を脱ぎ髮を披き赤裸々になりて走る聞慶に到り紙筆を索めて馳せて敗狀を上に啓し退いて鳥嶺を守らんと欲す申砬が忠州に在りと聞き遂に忠州に趨く

右相李陽元を以て守城の大將となし李戩邊彦琇を京城の右衛將と爲し商山君朴忠侃を京城の巡檢使となし都城を修めしむ復た金命元を起して都元帥と爲し漢江を守らしむ時に李鎰が敗報已に至り人心洶々たり

內間邸に去るの意あり外庭之れを知らず理馬金應壽賓廳に到り首相と耳語して去る而して復た來り觀る者之れを疑ふ蓋し首相時に司僕提調と爲るが故なり都承旨李恒福堂中に「馬を永康門の內に立つる」の六字を書して我に示す臺諫首相の國を誤るを劾して罷免を請ひ允されず宗觀閣門の外に聚り痛哭して城を棄つる勿からんことを請ふ府事金貴榮尤も憤々として諸大臣と入つて對し京城を固守せんことを請て且曰く倡議して城を



棄つる者は乃ち小人也上敎して曰く宗社は此處に在り予將何にか適かんと衆遂に退く然れとも事は爲す可からず坊里の民及び公私の賊胥吏三醫司を抄發して城堞を分守せしむ三萬餘にして城を守る人口僅かに七千卒皆烏合皆城に縋つて逃散するの心あり上番の軍士兵曹に屬すと雖も下吏と相與に奸を爲す賂を受けて私かに放つ者甚だ多し官員居留を問はざれば急に臨んで用ゆべからず軍政の解施一に此に至る

大臣儲を建てゝ以て人心を繫かんことを請ふ之に從ふ

同知事李德馨を遣はして倭軍に使せしむ尙州の敗倭學通事景應舜なる者有り李鎰の軍中にありて賊に獲らる倭將平の行長平の秀吉の書及禮曹を送る公文一道を以て應舜に授けて出送す且曰く東萊に在るの時嶠山の郡守を得て書契を傳送したるに今に至て未だ報せず朝鮮若し講和に意あらば李德馨をして二十八日に我と忠州に會せしむべしと蓋し德馨往年嘗て宣尉使となり倭使に接待す故に行長之れを見んと欲するなり應舜京に至り時事急にして計出づる所なし意ふに或は此に因て兵を緩けんと德馨

亦自ら行かんことを請ふ禮曹をして答書を裁し應舞を拜して而して去る

熒惑南斗を犯す京畿江原黃海平安咸鏡等の各道の兵を徵して入つて京城を援けしむ吏曹判書李元翼を以て平安道の都巡察使となし知事崔興源を黃海道都巡察使となす皆卽日派遣す將に西狩の議あらんとして元翼曾安州の牧使たり興源黃海の監司たり皆惠政あり民心の爲に喜ばるゝ所なるを以て之をして先往きて軍民を撫諭して以て巡幸を備へしむ賊兵忠州に入る申砬迎戰して敗れ死す諸軍大に潰ゆ鎰忠州に至る忠淸道の郡縣の兵來り會する者八千餘人砬馬嶺を保たんと欲す砬か敗るゝを聞き落膽して忠州に還る且李鎰邊璣等を召して俱に忠州に至り險を乘てゝ守らず號令煩撓見る者必ず敗るゝを知る親む所の軍官ありて密に賊已に嶺を踰んと報ず乃ち二十七日の初昏なり砬忽ち跳つて城を出つ軍中擾々砬か在る所をも知らず夜深に客舍に潛み明朝軍官妄言すと謂ひ引き出して之を斬る狀啓猶云ふ賊未だ尙州を離れず知らず賊兵已に二十里內に在ると因て軍を率きて彈琴臺の前雨水の間に出陣す其地左右稻田多く木草交雜馳驅



に便ならず少頃にして賊丹月驛より路を分つて至る勢風雨の如し一路は山を循つて東し一路は江に沿ふて下る砲響地を震ひ塵埃天に接す砬爲す所を知らず馬に鞭つて親ら陣を突かんとすれば再び入ることを得ず還つて江に赴き水中に沒して亂兵の中に死す李鎰東邊山谷の間より脫れ走る初め朝廷賊兵盛なるを聞き李鎰の獨力にして支へ難きを憂へ申砬が一時の名將にして士卒衆服するを以て重兵を引いて其後に隨はしめ兩將勢を協せて賊を制せしめんと欲す計未だ果さず不幸にして本道水陸の將皆恇怯其の海に在るに當つてや左水使朴泓一兵をも出さず右水使元均水路稍遠しと雖とも領する所の舟艦既に多く且賊兵一日俱に至るに非ず衆を悉して前進相持すべくに幸して一度捷たば則ち賊後に顧慮あるべくして未だ必ずしも遽かに深く入らず必ずや風を望み遠く避らん一たびも兵を交はす賊陸に登るに及び左右の兵使李班曹大坤或は遁れ或は遯す賊鼓を鳴らして橫行數百里の間人無き地を蹈み甚夜北上す一箇處として敢て齟齬して少く其の勢を沮む有無し十日ならずして已に尙州に至る李鎰の客將

軍なりしに猝に與に相角し勢固に敵せずとなし砬未だ忠州に至らすして鎰先づ敗れ進退據口を失ひ事是以て大に謬る嗚呼痛しひ哉後賊尙州に出づと聞く猶險を過ぐるを以て憚と爲す聞慶縣の南十餘里古城あり姑母と曰ふ左右の道交會する處に據り兩峽束ぬるか如く中に大川を盤し路はその下を出づ賊守あるを恐れ人をして再三覘偵せしに兵無きを見て乃ち歌舞して過ぐと云ふ其の後天將李提督如松賊を追ふて烏嶺を過ぐ嘆して曰く險有ること此の如し而も守を知らず申總兵謀無しと謂ふべしと蓋し砬輕銳時の名を得ると雖も籌略は其長ずる所にあらずと云ふ兵を知らざるは其の國を以て敵に與ふと今之れを悔ゆと雖とも及ぶ無し猶ほ後日の戒となすべし故に備にしか著す

四月三十日の曉車駕西へ巡る申砬既に去る都人日に捷を望む前夕氈笠三人あり馬を走らして崇仁門の城內に入る人爭つて軍前の消息を問ふ答へて曰く我か乃ち巡邊使の軍官奴僕なり昨日巡邊使忠州に敗死す諸軍大に潰ゆ我等身を脫して獨り來る歸て家人に報して兵を避けんと欲するのみと聞く者大に驚く過くる所傳て此の事を相告ぐ時を移さずして滿城俱に震ふ初昏宰執を召して出で避けんことを議す上東廟に御し地座して燈燭を張る宗室河源君河陵君等侍座す大臣啓す事勢此に至る車駕暫く出て平壤に幸し兵を天朝に請ふて以て收復せんことを圖れと掌令權悏對面を請ふて膝下に造り大聲呼んで京城を固守せんことを請ふ語器しき事甚し人あり謂つて曰く危亂の際と雖とも君臣の禮是の如くなるべからず少く退いて以て啓すべしと悏連りに呼んで曰く左相も亦此の言を爲すや然らば則ち京城棄つべきかと余啓して曰く權悏の言甚だ忠なり但事勢として然らざるを得ず因て請て王子を諸道に分遣し勤王の者を召集せしむ世子駕隨ひ議定る大臣出て閤門の外に在り旨を得臨海君は咸鏡道に往くべし領府事金貴榮漆關君尹卓然從順和君は江原道に往くべし長溪君黃廷或謹軍黃赫同知李堅從へと蓋赫か女にして順和夫人たるものなればなり而して李堅は原州の人たり故に竝に之れを遣す時に右相は留將たり領相竝に宰臣數十人以て扈從して點出す余命する處なし政院啓して扈從には柳

某なかるべからずと是に於て扈行せしむ内醫趙英旋政院吏申德麟の十餘人相呼て言ふ京都棄つべからずと俄かに李鎰か狀啓至る官中の衛士盡く散る更漏鳴かず火炬を宣傳官廳に得て狀啓を發いて之を讀み内に云ふ賊今明日當に都城に入るべし狀入つて後良々久しくして駕出つ三廳の禁軍奔り竄る昏黑の中互に相抵觸す適羽林衛池貴壽前を過く余之を認めて責めて扈從せしむ貴壽曰く敢て力を盡さゞらんや竝に其の遊二人を呼んで而して至る景福の宮前を過る十市街の兩邊哭聲相聞ゆ承文院書員李守謙余が馬轡を執つて問ふて曰く院中の文書當に如何にすべきと余其の緊關なるものを收拾して追つて來らしむ守謙哭して去る敦義門を出て沙峴に到る東方明けなんとす回視するに城中南大門内大倉火起り煙烟已に空に騰る沙峴を踰ゑ石橋に至つて雨作る京畿の監司權緞追至つて扈從す碧蹄驛に至つて雨甚し一行皆沾濕す上驛に入る頃くあつて卽ち出づ乘官此より還て都城に入るもの多し侍從臺諫往々に多くは後に落ちて至らず惠陰嶺を過く雨注くが如し官人弱馬に騎り物を以て面を蒙る號哭して而して



行く馬山驛を過く人あり田間に在り痛哭して曰く國家我を棄て去る我等何を恃んでか生きんと臨津の津に至る雨止まず上舟中に御す首相及び臣を召して入つて對せしむ既に渡ば將に昏になんなんとして咫尺を辨ずる能はず臨津の南麓舊と承廳あり賊の材を取て浮筏を作り以て濟らんことを恐れ命じて之を焚かしむ火光江を照らし路を尋ねて行くを得たり初更東坡驛に到れば坡州の牧使許晉は長湍の府使具孝淵を使員とし送遣して其處に在り略々御厨を設く扈衛の人終日飢來り厨中に亂れ入り爭奪して以て食し將に上供に闕けんとするばかりなり具孝淵惧て逃く五月初一日の朝大臣を引見して問ふ南方の巡察使能く勤王の者ありや否やと日曉れて乘輿開城に發向せんとす京畿の吏卒逃散して扈衛の人なし適々黃海の臨司趙仁得本道の兵を率ひて將に來つて援んとす瑞興府使南嶷先到る軍數百人馬五六十匹あり此を以て始めて發す行に臨み司錄崔彦誘出てゝ曰く官中の人昨日食せず今又未だ食せず小米を得て飢を療して行くべしと南嶷か軍人の持る所の糧を索め大小の米二三斗を雜へて以て午室の招賢

站に入る趙仁得來て朝たに帳幄を路中に設けて以て之を迎ふ百官始めて食を得たり夕開城府に次し南門の外に御す公署臺諫章を交へ首相と交結して國を誤る等の罪を劾す允されず二日臺諫仍て啓す首相罷らる余陞て之に代り崔興原左相となり尹斗壽右相となり咸鏡北道の兵使申砧適來る是の日午に上南城門樓に御して人民を慰撫し勅して各々をして懷ふ處を問ふ一人あり出てゝ行き俯伏す余等其の言はんとする對へて曰く願くは鄭政丞を召せと蓋し鄭徹時に竄れて江界に在り故に然か云へり上曰く知道すべしと卽ち命じて召して徹を行在に赴かしめ夕に官に還る余以て罪を罷め俞泓右相と爲り崔興源尹斗壽順次に陞る時に聞く賊尙ほ未だ京城に至らずと衆議皆都を去るの失を咎む承旨申砧をして還つて京城に入つて形勢を察せしむ初三日賊京城に入るや留都の將李陽元、元帥金命皆走る初め賊東萊より三路に分れて以て進み一路は梁山、密陽、淸道、大丘、仁同、善山より尙州に至つて李鎰の軍を敗り一路は左道長髻機張より左兵營蔚山、永州慶川、新寧、義興、軍威、比安、渡龍宮、河豐津を陷れ聞慶を出て中路の兵と合す



島嶺を踰へ忠州に入り又忠州より兩路に分れ一は驪州を超へ江を渡り楊根より龍津を經て京城の東に出つ一は竹山、龍仁に趣き漢江の南に至り又一路は金海より星州、茂溪縣より江を渡て知禮、金山を經て忠淸道永同を出て進んで淸州を陷れ京城に向ふ旌旗劒戟千里に相連り砲聲相聞ゆ過る所或は十里或は五六十里皆險に據て營柵を設け兵を留め守りを以てす夜は則ち火を擧げ相應ず都元帥金命元濟川亭に在り賊の至るを望見し敢て戰はず悉く軍器火砲器械を江中に沈め服を變じて以て逃る從事官沈友正從はず李陽元城中に在り漢江の兵既に散ると聞き城の守るべからざるを知り亦出てゝ楊州に走る江原道の助防將元豪初めて兵數百を率ひて驪州の北岸を守り賊と相持し賊渡る能はざるもの數日既にして江原道の巡察使柳永吉檄して元豪を召し本道に歸る賊閭里民家及び官舍を毀り屋材を取り聯ねて長筏を爲り以て渡る中流にして木流れ漂ひ死するもの甚だ多し而も豪既に去る江上一の守る者なし故に日を累ねて渡り畢る是に於て賊三路の兵皆京城に入る城中の民我勝ちに已に散走して一人も無し金命元

已に漢江を失ひ行在に向はんと欲し臨津に至命して更に京畿黄海の兵を徵し臨津を守らしむ且申砧に命して曰く守て以て賊の西下の路を遮かんとす是の日車駕開城を發して金郊驛に次す余も敢て後くれずして從行す四日車駕興義金岩平山府を過て寶山驛に次る始め開城を出るや時倉卒に際し宗廟神主を穆清殿に遣す宗室一人あり號泣して啓して曰く神主を賊の手に委すべからずと是に於て徹夜開城に馳せて奉還す五日車駕安城龍泉劒水驛を過て鳳山郡に次し六日進んで黄州に次り七日中和を過きて平壤に入る



# 懲毖錄卷之二

三道巡察使の軍龍仁に潰ゆ初め全羅道の巡察使李洸本道の兵を率ゐて入つて援く車駕西狩して京城已に陷ると聞き兵を收めて全州に還る道内の人洸が戰はずして歸るを咎め其他にも憤惋不平を抱く者多し洸自ら安からず更に兵を調へ忠淸道の巡察使尹國馨と軍を合せて進む慶尙道の巡察使金元も亦其の道より軍官數十餘人を率ゐて來り合し兵總て五萬餘なり龍仁に至りて北斗門の山上に賊の小壘あるを望見し洸先づ勇士白光彦李時禮等をして賊を試みしむ光彦等先鋒を率ゐて山に登り賊の壘を距ること僅かに十餘步にして馬を下り射を發す賊應戰せず日晩れて賊光彦等の稍々懈るを見て白刃を拔いて大聲叱呼しつゝ突出し光彦等倉皇として馬を索め走らんとす時既に遲くして皆賊の爲に害せられ諸軍之を聞いて震ひ懼る而て三巡察は皆文官にして兵事に習はず軍數多しと雖ども號令一ならず且嶮に據りて備を設けず眞に古人の所謂軍行は春遊の如し安んそ

敗れざるを得んや明日賊我軍の心怯懦なるを知り數人及を揮ひ勇を奮つて前み來る三道の軍之を望み大に潰ゆ聲山の崩るゝが如く軍資器械の委棄したるもの無數路を塞ぎて人の行く能はず賊悉く聚めて之を焚却す洸は全羅に還り國馨は公州に走り賊は慶尙右道に還る

副元帥申恪賊と楊州に戰ふて之に敗れ首を斬らるゝこと六十餘級宣傳官をして軍中に於て恪を斬らしむ初め恪金命元に從て副となるや漢江の敗に際して命元に從はず李陽元に楊州に從ふ時に咸鏡南道の兵使李渾が兵適々至る恪兵を合せて賊を迎へ京城より出てゝ閭閻を散掠し遂へ擊つて之を破る倭我國に入つてより我が捷は之を以て始めとなし人皆踊躍す金命元臨津にあり啓して曰く恪擅に自ら他處に適き號令に從はずと右相俞泓遽に之を誅せんことを請ふ宣傳官既に行て此の捷報來る朝廷人をして追て誅するの使を中止せしむ而も事は六菖十菊に畢れり恪元來武人なりと雖ども而も素より淸愼也嘗て延安府の使とし城を修理し壕を浚渫し多く軍器を備ふ後年李廷延安を守りて城を全ふせしと人以て恪の功なりと



し彼れ誅せらる其は彼れの罪ならずとす且九十歲の老母ありて聞くもの痛まざるはなかりき

知事韓應寅をして平安道江邊の精兵三千人を率ゐて臨津に赴いて賊を討たしむ令するに金命元が節度命令を受くること勿れと言ふことを以てす時に應寅京に赴き新に回る尹、左相衆に言つて曰く斯の人容貌福氣あり必ず能く事を辨せんと應寅遂に行く

韓應寅金命元の師臨津に潰へ賊江を渡る初め命元臨津の北にあり諸軍を分遣して列んで江灘を守り江中の船隻を斂めて悉く北岸に繫ぐ賊陣を臨津の南に結びて船の渡るべきものなく只だ僅に遊兵を出して江を隔てゝ交戰し相峙すること十餘日賊終に渡る能はず一日賊江上の廬幙を焚き惟倀を拔いて軍器を載せ退軍の狀に擬して我軍を誘ひく申砧素より輕擧少壯のものゆへ謀を知らず思らく賊實に遁るなりと江を渡りて追躡せんとす京畿の監司權徵砧の說と合ふ命元獨り合はずと雖ども禁ずる能はず是の日應寅亦來り將に衆を悉して賊を追はんとす應寅が率ゆる所皆江邊の

健兒なり北虜の國に近くして戰陣の形勢を悉く諳んず應寅に告げて曰く軍士遠くより來り疲弊して尚ほ未だ食せず況んや器械又た未だ整はず後軍の來るを待つべし且賊狀僞つて遁るも未だ知るべからざる也明日に至り形勢を觀察して進み戰はんと應寅之を聞き彼等が逗留して戰を好まざるものとなし數人を斬る命元は應寅が新に朝廷より來り且は朝廷より己が節度命令を受くること勿れと命ぜられ居るを知るが故に此の處置を不可なりと知ると雖ども敢て言はず別將劉克良年老いたれども兵に習ふ輕々しく進むべからずと力說す申砧之れを斬らんとす克良曰く吾髮を結んで軍に從ふ豈死を避くるを以て心と爲なさんや之れを測らずして相鬩ぐは國事を誤るものなりと憤然として出てゝ其の屬する手勢を率ゐて先づ渡り我軍既に險地に入る賊果して山後に伏して一時に起り諸軍奔潰す克良馬を下て地に坐して曰く此れ吾が死する所なりと弓を彎いて賊數人を射殺し遂に害せられ申砧も亦死す軍士奔て江岸に至れども渡る能はず岩石の上より自ら身を投じて以て江に入る風に亂るゝ木の葉の如し其の江



中に投ずるに至らざりしものは賊背後より長刀を奮つて之を斬りしかば皆匍匐して刃を受け敢て拒ぐものなし命元應寅江の北に在つて之を望み氣を喪ふ商山君朴忠侃適々軍中に在り馬に鞭して先づ走る衆之を望んて思へらく命元なりとし皆呼んで曰く元帥去ると難を守る諸軍聲に應じて皆散じ命元應寅行在に還る朝廷その罪を問はず京畿の監司權徵加平郡に入り亂を避く賊遂に勝に乘じて西下し復支ゆべからず

賊兵咸鏡道に入り兩王子賊中に入る從臣金貴榮黃廷彧黃赫及び本道の監司柳永立北兵使韓克誠等皆執へらる南兵使李渾走つて申山に入り我が軍の爲に庶民害せらるゝもの多し南北道の軍縣皆賊に沒す倭學通事咸廷虎と云ふもの京城に在り賊將淸正の爲に獲へられ同く淸正に隨て北道に入る賊退て後咸廷虎逃て京城に還り余に會つて北道の事を語ること頗る詳なり淸正賊將の中にあつて尤も勇悍善く鬪ふ平の行長と同く臨津を渡つて黃海道安城驛に至り分て兩界を取らんことを謀り各向ふ處を議す未だ決せざるが故に圖を拈つて決し行長は平安道を取るに決し淸正は咸鏡道

に進む是に於て清正安城の居民を擒にして先導せしむ二人辭するに此の地に生長して北路を諳せざるを以てす清正卽ち之れを斬る一人懼れて先導せんことを請ふ谷山の地よりして老里峴を踰へ鐵嶺の北に出で日に行くこと數百里勢ひ風雨の如し北道の兵使韓克誠六鎭の兵を率ゐて海汀滄に相遇ふ北兵騎射を善くす地又平坦なり乃ち左右交々出て丶且つ馳せ且つ射る賊支ふること能はず退て倉中に入る時に日旣に暮れ軍士少しく休んで賊の出るを俟ち明日又戰はんと言ふ克誠聽かず其軍を提げて之を圍む賊倉中の穀石を出だし列べ置きて城と爲し以て矢石を防ぎ而て其の內より鳥銃を放つ我軍櫛比して立ち重壘して束ぬるが如きが故に中れば必ず貫穿し或は一丸にして斃丶もの三四人軍遂に潰ゆ克誠兵を收めて嶺上に退きて屯し天明に至り更に戰はんとす賊夜中潛に行て我軍を環り兵を散じ草間に伏す朝に至り霧大に降り我が軍賊の山下に在るを疑ふや忽ち一聲の銃聲四面より響き叱呼しつ丶突起するは皆賊兵なり軍忽ち潰克誠將士賊なき處に向つて奔走して悉く泥澤の中に陷り賊追ひ來て芟刈し死



する者算無し克誠逃れて鏡城に入り遂に擒となる兩王子臨海君順和君俱に會寧府に至る蓋し順和君は初め江原道に在りしが賊兵江原道に入るが故に轉して北道に向ふ是時賊吶嗟に王子を追ふ會寧の吏鞠景仁其の親族を率ひて叛き先づ王子及び從臣を縛して以て賊を迎へ入る賊將清正其の縛を解いて軍中に留置し還つて咸興に屯す獨り漆溪君尹卓然路中に病と稱して他路より深く別堡に入り同知李兩王子に從はずして江原道に留るも皆執へらる柳永立賊中に拘留せらるゝこと數月賊彼れを文官と爲し或衛の兵少しく懈す永立間に乘じて脫走して行在に還る

李鎰平壤に至る鎰旣に忠州に破れ江を渡つて江原道の界に入り輾轉して行在に至る時に諸將京城より南下し或は死し或は走り一人として忽に屈從する者なし賊の將に近くを聞いて人心益々恟々たり鎰武將の中にあつて素より重名ある者に非ずと雖も奔敗の餘其の來るを聞いて皆喜悅せざるはなし鎰旣に屢々敗れ荊棘の中に竄れ平凉子を戴き白布袗を穿ち草を履んで來り形容憔悴し覩る者嘆息す余之れに語つて曰く此の處の人將に

君に倚つて重きを置かんとするに而も君の槁枯する此の如し何を以てか衆を慰撫せんと行藥の中を索りて藍色の紗帖裡を得て之を與ふ是に於て諸宰或は金笠を與へ或は銀項子彩纓を與へ當面改め換へて服飾一に新なり獨り靴を脱いて之に與ふる者なきが故に猶ほ草履を著く余笑つて曰く錦衣と草履と相稱はずと左右の人皆笑ふ俄に碧潼土兵任旭景報じて曰く賊已に鳳山に至ると余尹相に謂つて曰く賊の斥候應に已に江外に至るべし此の間詠歸樓下江水岐れて二となり水淺くして涉るべし萬一賊我民を得て擣導せしめ暗に乘じて渡り猝かに來らば則ち城危からん急に鎰を遣はし往て淺瀨を奪つて以て不測の變を未然に防ぐに如かずと尹公曰く然りと卽ち鎰を遣す時に鎰か率ゆる所の江原の軍僅かに數十餘人なり他軍を之にれ加へて數を增す鎰合毬門に坐し兵を乘列せしめて卽刻發せず余事急なるを念ふて人を使はして之れを見せしむるに猶門上に在り余連りに尹公に告げて之れを促さしむ鎰初めて出發す既に城を出でしが路を指導する者なきが爲に誤て江西に向ふ路にして平壤の座首金胤の外より來



るに過ひ强ひて漸く先導せしめ馳せて萬垣基の下に至る城を距ること數十餘里江南の岸を見るに賊兵來り聚る事已に數百江中の小島に居る所の民驚き叫び皆な奔散す鎰急に武士十餘人をして島中に入り之れを射擊せしむ軍士敵を畏れて進まず鎰劒を拔いて斬らんとす之れより漸く進む賊已に水中に在りて多く岸に近づく我軍急に强弓を引いて之を射り連りに六七人を斃し賊遂に退く鎰仍て留て渡江を守る

遼東の都司鎭撫林世祿をして來て倭の內情を探らしむ上之れを大同館に引見す余五月より罷められしも六月初一日に復職し是の日命を承けて唐將を接待す時に遼東倭の我國を犯かして以來未だ久しからざるに我亦都城を堅守せずして忽ち車廐西に遷し倭兵又た已に平壤に至ると聞き甚だ之を疑ふて思へらく倭の變急なりと雖とも猝遽なること此の如くなるべからず或は思ふに我國倭の先導となれるに非ざるかと依つて世祿來る余世祿と與に練光亭に上り形勢を望察するに一倭の江東林木の間より乍ち見れ乍ち隱るゝあり已にてし二三の倭繼いて出で或は坐し或は立ち意態

甚だ安閑として宛も行路に休憩するが如し余世祿に指示して曰く此れ倭の斥候なりと世祿柱に倚つて望み殊に不信の顏色を以て曰く倭の兵何ぞ少きやと余曰く倭巧詐なり大兵後にありと雖とも先來て偵察するもの五六人に過ぎず若し其の少を見て之れを忽諸にせば則ち必ず賊の術に陷らんと世祿唯々として亟かに歸らんことを求め馳せ去る左相尹斗壽に命じて都元帥金命元巡察使李元翼等を率ひて平壤を守らしむ數日前城中の人車駕の出で逃れんとするを聞き各自逃れ散つて閭里殆んと空し上世子に命じて大同館の門に出で城中の父老を集め諭すに堅く守るの意を以てす父老進み出でゝ曰く今東宮の命を聞くも民心信せず聖上親ら出でゝ諭すことを得ば乃ち可なりと明日上己むを得ず館門に御して承旨をして曉諭せしむること昨日の如し父老數十人拜伏痛哭して命を承けて退き遂に各々分れ出で市民を招集して悉く老弱男女子弟の山谷に竄伏する者を誘出し城に入り城中又た人を以て滿つ既にして賊影を大同江邊に見るに及んで宰臣慮禋等廟社の位版を奉じ並に官人を護つて先づ出つ是に於て城中



の吏民亂を作し及を挽き路に横り縱まに擊ち廟社の主を路中に墜す從行する所の宰臣を指して大に罵て曰く汝等平日國祿を偸み食む今乃ち國を誤り民を欺くこと斯くの如しと余棟光亭より行宮に赴く路上婦女幼稚を見るも皆な怒髮天を衝き相與に號呼して曰く既に城を棄てんとすか何の故あつて我等を欺き城に入れて賊手の魚肉たらしむるやと宮門に至れば亂民街に塞り皆袖を塞げて兵仗を持し人に遇へば乃ち擊つ紛囂雜沓禁ず可らず福宰門內の朝堂に在る者皆色を失ふて庭中に起立す余亂民の宮門に入らんことを恐れ出でゝ門外の階上に立ち其の中の年長けて髯多き者を見手を以て招く其の人卽ち來る彼れは士官なり余之れに諭して曰く汝等力を竭し城を守らんと欲し車駕の城を出るを願はず是れ國の爲にするの忠は則ち至矣但此れに因て亂を作し宮門を驚擾するに至つては事甚だ駭くべし且つや朝廷方に啓して堅守せんことを希ひしに上已に之を許す汝等何事ぞ乃ち爾るか汝が貌容を見るに乃ち有識の人なり此の意を以て須く衆人を曉諭して退かしむべし爾らずんば則ち汝等將に重罪に陷て赦

すべからざらんと其の人卽ち技を棄て手を斂て曰く小民城を棄てんとするを聞いて憤慨に勝へず妄りに動くこと此の如し今此の言を聞く小人迷劣なりと雖ども胷中卽ち豁然たりと遂に其衆を提て散ず蓋し此より先き朝臣賊兵の將さに近かんとするを聞き皆出てゝ避けんことを請ふ兩司弘文館連日閣に伏して力請す寅城府院君鄭徹尤城を出てゝ難を避けんことの議を主唱す余は曰く今日の事勢京城に在るの時と異なれり京城は則ち軍民崩潰す之れを守られと欲すと雖ども未だ由る處なし此の城は前に江水を控へて民心頗る固し中原の地方に近きて若し堅く守ること數日ならば天兵必ず來り救はん其の時之れを藉りて賊を却くるも遲からず然らずんば此處を退いて義州に至らば更に據るべきの地なく勢として必ず國を亡すに至らんと左相尹斗壽余が議に同す余又鄭徹に謂つて曰く平時意ふに公憤慨して難易を避けずと言ふを常としたりしに圖らざりき今日の議此の如くならんとはと尹相文山の詩を詠じて曰く、欲我借劍斬佞臣と寅城大に怒り袂を奮つて起つ平壤の人も余が守城の議たるを聞くが故に是の



日余が言を聞いて頗る順從に退く夕に至り監司宋言愼を召して責るに亂民を鎭定する能はざるを以てす故に言愼その主唱者三人を大同門の內に斬り餘は皆散り去る時に已に城を出ることに定む而も適く所を知らず朝臣の多くは曰く北道の地僻に路險にして以て自ら兵を避くるに適すと蓋し此の時賊兵已に咸鏡を犯し道路通せざれは變を報ずる者なきが故に朝廷之れを知ざるなり是に於て同知李希得曾て永興の府使たり惠政を取り民心を得るを以て之れを咸鏡道の巡檢使となし兵曹郡金義元を從事官とす而して北道を往くや內殿及び官嬪以下先づ出てゝ北に向ふ臣固く爭つて曰く車駕西狩するは本と天兵に倚賴して興復を圖らんと欲するのみ今既に兵を天朝に請ふ而るに顧て深く北道に入る中間にして賊押し隔つるの策に出でなば天朝の聲問亦通ずべきの路無し況んや恢復を望むをや且賊散して諸道に出づ安くんぞ北道必ずしも賊兵なきを期せんや賊兵若し不幸にして北道に入り次第に來らば去るの路なく只北虜の地あるのみ何の處にか據るべき其の危道たるも亦甚だしからずや今朝臣の家屬多くは

亂を北道に避く故に各私の小計を顧みて皆北に向ふの便なるを言ふ臣老母あり亦東に出て亂を避け在る處を知らずと聞く而らば必ず流れて江原咸鏡の間に入らん臣又私計を以て之を言はゞ則ち豈北向の情なからんや只國家の大計は人臣と同論に語るべからず故に敢て此に懇ろに陳ぶるのみとやがて嗚咽し流涕す上惻然として曰く卿が母何處にか在りや之れ皆予か故なりとその者既に退く知事韓準又獨り對面を請ふて力めて北に向ふの便なることを說く是に於て中殿遂に咸鏡道に向ふ時に賊大同江に至ること已に三日余等棘光亭に在て越邊を望見するに一倭あり木末を取り之れに紙片を懸け江沙の上に挿む大砲匠金生麗に令して小舟に掉して往て之を取らしむ倭兵器を帶びず生麗と手を握り背を撫いて極て親昵の情を表はす書を附して以て送る書至る尹相開くを欲せず余は曰く開き見ること何の妨けかあらんと開いて視れば則ち書面に曰く朝鮮國禮曹判書李公閣下に上ると蓋し李德馨に與ふる書にして平の調信玄蘇が裁する所のものなり大概德馨に面會して講和のことを議せんとするなり德馨扁舟を



以て平の調信玄蘇と江中に會し相勞問すること平日の如し玄蘇言ふ日本道を借つて中原に朝貢せんと欲す而して朝鮮許さず故に事此に至る今亦一條路を借つて日本をして中原に達せしむるときは則ち無事なるを得んと德馨約に負くことを以て責め且兵を退けて後講和を議せんと答ふ調信等語頗る不遜なり遂に各別れ去る夕に至り賊數千陣を江東の岸上に結ぶ

六月十一日車駕平壤を出てゝ寧邊に向ふ大臣崔興源俞泓鄭徹等扈從す左相は金元師李巡察元翼と平壤に留つて守る余も亦唐將に接待するの故を以て留る是の日賊城を攻む左相元帥巡察及び余等棘光亭に在り本道の監司宋言愼大同城を守る門樓の兵使李潤德浮碧樓以上江灘を守る慈山郡の守尹裕俊等長慶門を守る城中の士卒民夫合せて三四千分ちて城堞に配置す部伍明ならず城上の人或は疎に或は密なり或は人の上に人あり肩背相磨し或は數梁を連ねて一人も無き處あり衣服を乙密臺の近處松樹の間に散らし掛けて名けて疑兵と曰ふ江を隔てゝ賊を望むに亦甚多からず東大院の岸上一字陣を排列して紅白旗を竪て列ぬ我國の挽章の樣の如し十

餘人を出して羊角島に向ふ江中に入れば水馬腹を沒す皆輿に倚つて列び立ちて將に江を渡らんとするの狀を示す其の餘の江を往來する者は或は一二人或は三四人大劒を荷ふ日光射て閃々として電の如し或者云ふ眞の劒に非ずと實に木を以て之を爲り沃に白蠟以て人眼を眩するなりと然れども遠くより望めは眞僞を辨せず又六七の賊烏銃を持し江邊に到り城に向つて放つ聲響甚た壯んなり彈丸江を過ぎて城に入る遠き者さへも大同館に入りて瓦上に散落すること幾千餘步或は城樓の柱に中り深く入ること數寸なり紅衣の賊あり棟光亭上に諸公の會合して坐するを見て將師たることを知り烏銃を挾み眼を整へ銃を擧げて漸く進み來る沙渚の上に至て彈丸を放つや亭上の二人に中る然れとも遠きが故に傷重からず余軍官姜士益をして防牌の內より片箭を以て之を射さしむ矢沙上に達す賊逡巡して却く元師善く射る者を選びて快船に乘じ中流にして賊船を射せしむ稍東岸に近くに賊又退き避く我軍舡上より玄字銃の大箭宛も椽の如くなるを放つて江を過ぐ倭の衆仰ぎ視て皆叫譟して散し箭地に落つ皆爭ひ聚



め之を觀る是の日卽ち兵舡を整へざるを以て工房の吏一人を斬る時に雨久しく降らず江水日に縮まる曾て宰臣をして雨を檀君箕子東明王の廟に禱らしむ猶雨降らず余尹相に謂つて曰く此處水深して舡無し賊遂に渡る能はず唯だ水上淺瀨多し早晚賊必ず此れより渡らん渡らば則ち城守るべからず何ぞ嚴重に備へざるやと金元師性緩慢なりたゞ曰く已に李潤德をして之を守らしむ何ぞ嚴重に備ふる要あらんと余か曰く潤德等何ぞ數ふるに足らんと李巡察を指して公等一箇所に會合し空しく坐すること宴席に集るが如し事に當つて益なし往つて江灘を護るに如くなしと李曰く若し命あつて往つて見よとあらば敢て力を盡さゞらんやと答ふ是に於て尹相李に謂へらく公往くべしと李起つて出づ余時に命を承け只唐將に應接して軍務に參らず默然として念ふに李の軍必ず敗れん如かず早く唐將を中路に迎へんには速かに一步を進めて來り救はば我軍を危機より濟ふべけんと日暮れて遂に從事官洪宗祿辛處晋と共に城を出で夜を深くして順安に到る路中李陽元從事金廷睦淮陽より來るに逢ふ彼等に聞くに賊兵鐵

嶺に至れりと明日肅川を過て安州に至る遼東の鎮撫林世祿又來接し書を行在に送らんとするなりと余之を受く翌日車駕已に寧邊を離し博川に次すと聞く余馳せて博川に詣る上東軒に鄉して臣を引見し平壤守る可らざるかを問ひ玉ふ臣對へて曰く人心頗る固し守り得るに似たりたゞ援兵速かならざれば不可なり故に臣此が爲に來て天兵の速に到着するを迎へ直に馳せて之れを援はんことを請ふなり而も今に至つて兵の至るを見ず茲に於てか悲まさるを得んやと上手づから尹斗壽が狀啓を取つて臣に示して曰く昨日已に老弱の民を城より出すされば人心必ず搖かん然らば何を以てか能く守るを得んと臣對へて曰く誠に聖慮の如し臣彼處に在りし時には未だ事斯の如く大ならざりしが大概其の形勢を觀るに賊必ず淺灘よりして渡らん宜く多く菱鐵を水中に布き以て之に備ふべしと上此の縣も亦菱鐵ありやを問はしむれば數千箇を有すと對ふ上曰く急ぎ人を募つて之を平壤に送れと臣又啓して曰く平壤の以西江西龍岡甑山咸從等の邑は倉穀多く人民亦多し賊の兵已に近くを聞かば則ち必ず驚駭して散失すべ



けん宜く急ぎ侍從一人をして此處より馳せ去つて彼等を鎭撫し且兵を收めて平壤の繼援使となすべしと上の曰く誰人を以て之れが使となさんや臣對へて兵曹正郎李幼澄計略に富み思廣深き故彼れを遣し給へと曰ひ且啓して臣が事急なり遲滯すべからず當に徹夜馳せて唐將を迎へんことを期すべしと遂に辭して退出す李幼澄に會して上の出づるより前に達せんことを語る幼澄愕然として曰く此れ乃ち賊の窠窟なり何ぞ進むを得んやと余之れを責めて祿を食んで難を避けざるは臣子の義なり今國事危急如何なる湯火と雖ども避くべきにあらず願ふに此の一行を以て難しと爲すやと幼澄默然として悔恨の色あり余既に拜辭して出づ大定江邊に至る日已に西に傾く首を回して廣通院の野を望めば散卒絡繹として來るあり平壤の守を失ふを疑ふ軍官數輩をして馳せ往きて之等の軍官を收容せしめしに十九人を得たり是れ卽ち義州龍川等に處したる軍にして平壤に往き江灘の守たらんとする者たり言ふ昨日賊已に王城の灘よりして江を渡る江上の軍潰ゆ兵使李潤德遁走すと余大に驚き卽刻路中に書狀を爲り軍官

崔允元をして馳せて行在に報せしむ夜嘉山郡に入る是の日夕內殿博川に至ると蓋し路に在て賊兵已に北道に入ると聞く故に前まずして回る通川郡守鄭迷使をして物膳を進めしむ平壤陷る車駕嘉山に次る東宮廟社主を奉じて博川より山郡に入る初め賊兵分れて江沙の上に駐る者十餘屯に上る草を結んで幕と爲し既に日を累ねて江を渡る能はず警備頗る怠る金命元等城の上より望み見て思へらく夜に乘じて掩襲すべしと爲し精兵を抄擇し高彦伯等をして之を領せしめ浮壁樓より繞羅渡を下り潛に船を以て軍を渡し約して三更事を擧げんとす然るに時刻を失し漸にして渡る時最早昧爽なり諸幙中を見るに賊猶未だ起きず遂に進んで第一の陣を突く賊驚擾す我軍多く賊を射て殺す士兵任旭景先登として力戰して賊の爲めに害せらる賊馬三百餘匹を奪ふ忽ちにして陣を整へ賊悉く起て大に來る我軍退き走り還て舡に趨く船上の人賊已に後に迫るを見て中流にありて敢て船を艤せず渰死する者甚だ多し日暮れて賊衆を擧げて灘より濟る我軍の灘を守るもの敢て一矢をも發せずして皆散走す賊既に渡りたるとき猶



城中に滯るを疑ひ遲回して前まず是の夜尹斗壽金命元城門を開き盡く城中の人を出し軍器火砲を風月樓の池水の中に沈む斗壽等は普通門より出て丶順安に至る賊の追躡し來る無し從事官金信元獨り大同門を出て丶舡に乘つて流に順つて江西に向ふ明日賊城外に至り牧舟峯に登つて良久しく觀望し城空しく人無きを知り乃ち城に入る始め車駕平壤に至る廷議皆粮餉を以て憂となし盡く列邑の田稅を取つて平壤に輸送せしむ城陷るに及んで本倉穀十餘萬石を幷せて皆賊の爲に獲らるゝ所となる時余の狀報博川に至る又巡察使李元翼從事官李好閔も亦平壤より來つて賊の江を渡るの狀を語る夜車駕及び內殿發して嘉山に向ふ世子を命じて廟社を奉じ別に他の路よりして四方の民を召集して以て興復を圖らしめんとす臣僚を分ちて之れに從行せしむ領議政崔興源命を以て世子に從ひ右議政俞泓も亦自ら世子に隨はんことを請ふ上答へず駕既に出づ泓路傍に伏して辭し去る內官屢々右相俞泓の辭することを請へる由を啓す上終に答へず泓遂に東宮に從ふ時に尹斗壽平壤に在て未だ遠らず行在に大臣なし惟鄭澈

舊相なるを以て駕に從て嘉山に至る已に五數なり車駕定州に次る駕平壤を出づるより人心崩潰す過る所の亂民輙ち倉庫に入り穀物を搶掠す順安肅川安州寧邊博川等次る所皆敗る是の日駕嘉山を發す郡沈信謙余に謂つて曰く此の郡粮穀頗る豐かなり官廳も亦白米一千石あり之を以て天兵の兵粮に供せんとす然るに不幸此に至る公若し少らく留つて鎮定せば邑人亦敢て動かざるに至らん然らずんば亂作らん小人亦敢て此處に留らずして將に海邊を指して身を躲さんと時に信謙已に其の下率に命するの權を失ふ獨り余が帶ぶる所の軍官六人及び路中收る所の潰卒なる人なり余約束して之をして自ら隨ひ來らしむ故に各々弓箭を帶んで傍に在り信謙此を藉りて自ら護らんと欲するが故に上に逃ぶるが如く云へるなり余直に發するに忍びず少時らく大門に坐す日已に午を過く更に念ふ上命無くして擅に留つて行かずんば義に於て未だ安からずと遂に信謙と別れて行く曉星嶺に上り嘉山を回望するに郡中已に亂る信謙盡く倉穀を失つて逃る翌日車駕定州を出て宣川に向ふ臣に命じて定州に留らしむ州人已に四方



に散して亂を避く獨り老吏白鶴松等の數人城中に在るのみ余路邊に伏して駕を送つて城を出で涙を掩ふて延薰樓の下に坐す軍官數人左右の階下に在り收る所の敗兵十九人は猶去らずしてあり馬を路邊の柳木に繫て相環つて坐す時晩れなんとす南門に杖を執る者あり外より連絡して來り左邊に去るを見る軍官をして之を視せしむるに倉中に聚る者已に數百餘人なり余思へらく我れ等寧ふる所寡弱なり若し亂民益々多くして之れと爭鬪せば則ち制し難からん如かず先づ弱き者を攻めて之を驚散せしめんにはと是に於て城門を視るに繼き至る者十餘人あり余急ぎ軍官を呼んで十九卒を從へ馳せて之を捕ふ其の人遠くより望み見て奔り去る追及して九人を捕へて來る卽ち髮を披いて剃つて之を赤禿となし倉邊の道路に徇べしむ十餘卒其の後に隨て大に呼んで曰く倉賊を擒剃す將に刑を行て梟首すべしと城中の人之を見る是に於て己に倉下に聚る者も望み見て惶れ駭き悉く西門に從つて散し去る是れより定州の倉庫僅に全きを得たり龍川宣川鐵山等邑の倉を犯すものも亦絕ねたり定州の判官金榮は一の武人な

り平壤より奔り還り其の妻子を海邊に置き倉穀を盜み出して之に送らんとす余聞きて之を戒めて汝武將たり敗軍となつて死せす其の罪誅すべきに又敢て官穀を諭み出すを此の穀は將に天兵に供せんとするなり汝か得て利する者にあらざるなりと之を杖(ムチウ)つこと六十。既にして尹左相金元師武將李寧等平壤より皆定州に至る上定州を出づ時に命あり左相若し來らば亦定州に留住せよと尹至るに及んで余上の命を傳ふ尹答へず直に行在に向ふ余も亦金命元李寧等を留めて定州を守らしめ上の後を追ふて輿に乘じ龍川に至り會す時に郡邑の人民平壤陷ると聞て賊の後へに隨て來らんことを慮りて盡く山谷に竄れたれば路上一人の人を見ず聞く江邊の列邑は江界等の地の如き皆人無きこと此の如しと余行き郭山に至る山城の下岐路あるを見る下卒に問ふて曰く此は何處に向ふの路ぞやと曰く此は龜城に走るの路なりと答ふ余馬を駐めて從事官洪宗祿を呼んで曰く沿道の倉庫皆空しく天兵來る時何を以てか供せん此の間惟龜城の一邑倉庫儲峙頗る豐優なり而も亦聞く吏民盡く散すと君久しく龜城に在り其處の人若



し君の至ることを聞かは山谷の中に隱るゝと雖とも必ず來り見て賊の勢を聞かんと欲する者有らん君此より急き龜城に去つて之れを諭して曰く賊平壤に入つて尙出發せず天兵方に大に至るが故に收復するも遠からざるべしと思ふる所は一路糧糧の不足あるのみ汝等品官人吏を諭ずる無く一致の力を盡して軍糧を運輸し軍與の兵粮に缺乏なからざらしめば後日必ず重賞あらん此の如くんば庶幾くば心を同うし力を協せて定州嘉山に輸送し以て事を濟すべしと宗祿慨然として應諾して路を分つて去る余自ら龍川に向ふ蓋し宗祿は已丑の獄に坐し謫せられて龜城に在り車駕平壤に至つて後始めて赦されて位に叙せられ司憲正と爲る人物忠實身を忘れて國に殉し夷險之志を避けざる者なり

車駕義州に至る天將參將戴某遊擊將軍史儒各々一枝兵を領し平壤に向ふ林畔驛に至つて平壤已に陷ると聞き亦還て義州に駐る天朝軍を犒ふ爲に銀二萬兩を賜ふ唐官領して義州に至る是より先き遼東我國の賊變あるを聞きて卽ち奏聞す朝議異同多し甚しきは或は我れ賊の爲に先導たるや

を疑ふものあり獨り兵都尚書叫て俄に至り遼東の變を報ずるの書を出して之を示す使者黠卽號哭して一行と朝夕來り大に援兵を出さざることを請ふ尚書奏して二枝の兵を出して住て國王を守り且銀を賜らんことを請ふ黠回て通州に至る告急使鄭崑壽繼て至る尚書引て火房に入れ親く書狀を問ふ對へて或は流涕のことに至らんと言ふを聞て是に於て連りに使を遣して遼東に至り急を告げ援を請ひ且內附せんことを乞ふ蓋し賊已に平壤を陷る勢瓶(カラス)を建か如し意ふに朝夕の間に當に鴨綠(アリたし)江に來らん事の危急なる此の如し故に內附せんと欲するに至る幸に賊既に平壤に入り跡を城中に歛めて延て數月に至り順安永柔は平壤を去ること呎尺なりと雖ども而も猶來り犯さず此を以て人心稍定る餘燼を收拾し天兵を導迎し終に恢復の切を致す此れ實に天也人力の至る所に非ず

七月遼東の副總兵祖承訓兵五千を率きて來り援くの報先づ至る時余痔を病んで苦しむこと甚しく臥して起つこと能はず左右をして出でゝ沿道の軍食を治めしむ余從事官辛慶晋をして啓せしむ曰く行在の時大臣に任



ずるもの只斗壽一人あり出つべからず臣已に唐將を接持するの命を受け病めりと雖とも自ら力めて一に此の事に當らんと上之を許す初め七日疾を力めて行宮に詣り拜辭す引對を許されて徇匄して入啓して曰く一路は所串より以南定州嘉山に至つては五千の兵經過するも一二日の食は辨ずべし安州肅川順安の三邑は蕩として備ふる所なし天兵此れを過ぐるあらば宜しく三日の糧を持して以て安州以南の食に備ふべし若し兵平壤に至り卽日に收復せば則ち城中粟多くして以て供すべし城を圍む事累日と雖とも平壤より西の三縣の穀亦力を滿して軍前に輸送せしむべければ闕乏するに至らじ此等の曲折は請ふ此處に在るの諸臣をして唐將と相議し濟狹相濟く便宜に施行せしめんことをと上曰く然りと既にして出でゝ內より熊膽臘藥を賜ふ內醫院僕龍雲と云ふもの余を城門外五里の處に送つて痛哭す余箭門嶺に登りしときに哭聲猶聞ゆ夕に所串驛に至る吏卒逃れ散じて形影を見ず軍官をして往て村落の間を搜て數人を得て而して來る全諭をして曰く國家平日汝等を撫養す用は今日に在り何ぞ忍て逃れ避るや

且つは天兵方に至る國事正に急なり是れ卽ち汝等か勞を效とし功を立つるの秋なりと因て空冊子一卷を與へて先づ來り見る者の姓名を書し之を示して曰く後日賞に此れを以て功勞を等第し啓聞ひて論賞すべし其のれ日の錄に在らさる者は事定つて一々査覈して罰を行て免恕すべからずと既して來りし者相繼く皆曰く小人事に因て暫く出てたれとも豈敢て後を避けんや願くは名を冊に書せられんことをと余人心の合ふべきを知り卽ち各處に移文して例として考巧冊を置き功勞の多少を書して之れに依つて順次施行せしむ是に於て命を聞く者爭出てゝ柴草を運搬し房屋を架造し金鼎を排設す數日の間に凡ての事稍整頓す余思へらく亂離の民は急に用ゆべからずと但至誠を以て曉諭して未だ嘗て一人をも鞭撻せず進て定州に至る洪宗錄盡く龜城の人を起し馬豆及び小米を運輸し定州嘉山に到れば已に二千餘石余猶安州以後に憂を爲さんことを思ふ適々忠淸道牙山倉の稅米全一千二百石船に載せて將に行在に向はんとして定州の立岩に到り泊す余喜ぶこと甚し卽ち啓を馳せて曰く送穀適々到ること豫め期を



定めるたるが如し是れ天の中興の運を贊くるに似たり請ふ凡べて取つて以て軍餉に補はんことをと守門の將姜士雄をして馳て立巖に至らしめ分ちて二百石を定州に二百石を嘉山に八百石を安州に運へば安州は則ち賊近きを以て姑く船を水中に停めて以て之を貯藏せしむ宣沙浦の僉使張佑成大定江の浮橋を造り老江の僉使閔繼仲晴川江の浮橋を造り天兵を渡さんことを擬す余前きに安州に往きて調度す時に賊又平壤に入りて久しく出でず巡察使李元翼兵使李薏と順安に駐る都元帥金命元蕭川にあり余は安州に在り

十九日祖總兵が軍平壤を攻む利あらずして退く史遊擊死す是より先き祖承訓義州に至る史儒其の軍を以て先鋒となす祖は乃ち遼左の勇將累に北虜と戰つて功あり是の行に於て謂へらく倭必ず取るべしと嘉山に至る我が人民に問ふて曰く平壤に賊無く已に走れるかと曰く退かずと承訓酒を擧げて天を仰ぎ之を祝して曰く賊猶在り必ず天我れをして大功を成さしめよと是の日順安より三更に軍を發して進で平壤を攻む適々大雨あり

城の上に賊の守兵なし天兵七星門より入る城内路狹く委巷多くして馬足展ぶべからず賊險阨に依て鳥銃を亂發す史遊擊丸に中つて斃る軍馬多く死す祖逖に軍を退く賊急に追はず後軍泥潦の中に陷て自ら拔ふこと能はざるものは悉く賊の爲に害せらる承訓殘兵を率ゐて還て順安肅川を過ぎ夜中安州の城内に至り馬を立て譯官朴義儉を呼んで曰く吾が軍今日多く賊を殺す不幸にして史遊擊傷死す天の時又利ならず大雨泥濘にして賊を殲滅すること能はず當に兵を添へて更に進擊すべきのみ汝が宰相に語れ而して動く勿れ浮橋も亦撤すべからずと言ひ畢つて馳せて兩江を渡り軍を控江亭に駐む蓋し承訓戰ひ破れ膽怯れて賊の追躡を恐れ前面に二江を以て敵を阻止せんと欲す故に疾急なること斯くの如し余辛從事をして往て慰問せしむ且つ粮饌を載せて送る承訓控江亭に留ること二日連日連夜雨大に降る諸軍野中に露營して衣甲盡く沾ふ皆承訓を怨み而して退て遼東に還る余人心の動搖せんことを恐れて啓請して仍て安州に留り以て後軍の來るを待つ、



全羅の水軍節度使李舜臣と慶尙の右水使元均全羅の右水使李億祺等と大に賊兵を巨濟洋中に破る初め賊既に陸に登る均賊勢の大なるを見て敢て出でず悉く其の戰舡百餘艘及び火砲軍器を海中に沈め獨り手下の悍將李英男李雲龍等と四船に乘り奔て昆陽海口に至り陸に下て賊を避けんとす是に於て水軍萬餘人皆潰ゆ英男諫めて曰く公命を受けて水軍の節度使となる今軍を捨てゝ陸に下る後日朝廷罪を詰せば何を以てか自ら解かん如かず兵を全羅道に請ふて賊と一戰し勝たずして然る後に逃るも未だ晩からずと均之を然りとし英男をして舜臣に往て援を請はしむ舜臣辭するに各々分界を有つ朝廷の命に非らずして豈擅に自ら境を越ゆべけんやと均又英男をして往て請はしむ凡て往返すること五六回にして已まず英男が歸る毎に均船頭に坐して望み見て痛哭す既にして舜臣板屋船四十艘を率ゐ竝に億祺と相約て巨濟に到り均と兵を合せて進み賊と見乃梁に遇ふ舜臣が曰く此地海狹く水淺し回旋するに至難なり如かず詐り退て海澗の處に至りて相戰はんと均憤激に乘じて直に進んで搏戰せんことを欲す舜

臣が曰く公兵を知らず此の如くんば必ず敗れんと遂に旗を以て其の船を擁て退く賊大に喜び爭て之れに乘ず既にして海の隘所を出づるや舜臣鼓を鳴らすこと一聲諸船一齊に棹を回して海中に擺列して正に賊船と擂着し相距ること數十步なり是より先き舜臣創めて龜舡を造り板を以て其の上に鋪く其の形狀窟龜の如く戰士擢夫皆其の內にあり左右前後多く火炮を載す縱橫出入梭の如く賊船に過て連りに大砲を以て碎き諸船一時に合擊す烟焰天に漲り賊船を焚くこと無數なり賊將樓船の高さ數丈の上に在り樓櫓を施し紅段彩旌を以て其の外を圍ふ之れ亦我が大砲の爲に破られ賊悉く水に赴いて死す其後賊連りに戰つて皆敗る遂に遁れて釜山巨濟に入つて復び出でず一日方に舜臣戰を督したるに流丸舜臣が左肩に中る血流れて踵に至る舜臣人に語らず戰ひ罷つて始めて刀を以て肉を割き丸を出す丸深く入ること數寸、觀る者色を失ふ而るに舜臣談笑自若たり捷報朝廷に達し朝廷大に喜ぶ上舜臣に加ふるに一品を以てせんとす或る者言へらく大に善しと彼れを正憲に陞し億祺、均を嘉善に陞す是より先き賊行長



平壤に至り書を投じて曰く日本の舟師十餘萬又西海より來る思ふに大王の龍御此處より何處にか行くを知らざらんと蓋し賊本と水陸勢を合せて西に下らんと欲す此の一戰に依て遂に賊の一脊を絕つ行長平壤を得ると雖ども而も勢孤にして敢て更に進まず我は全羅忠淸を保て以て黃海平安に及び沿海一帶に軍食を調度し、號令を傳通し以て中興を濟すことを得而して遼東の金灣海は天津等と共に戰の餘波を受けず天兵をして陸路より來援して以て賊を退くるに到らしむ者皆此の一戰の功なり嗚呼大ならずや舜臣三道の舟師を率ゐて猶ほ留つて閑山島に屯し以て賊の西犯の路を遏む

前の義禁府の都事曹好益兵を江東に募つて賊を討つ好益は昌原の人志行有り人の爲に誣せらる所となりて全家江東に徒る貧困して弟子に敎授し以て食を得ること幾んど二十餘年勵操愈々堅し車駕平壤に至るの途中其の罪を赦し召されて義禁府都事に拜せらる平壤圍るゝに及んで江東に往き兵を募つて平壤を救はんとす既にして平壤陷る軍民皆潰ゆ遠々行在

に往く余良策驛を過ぎて之れに語つて曰く天兵將に至らんとす子義州に往くこと勿れ江東に還るべし仍て行ひて兵を召募し天兵と平壤に會し以て軍勢を助けよと好益之れに從ふ余遂に其の由を狀啓す兵を起すの書を作り好益に授け且つ助くるに軍器を以てす好益去つて兵を聚め數百人を得て出でゝ祥原に陣して賊を迎へ斬獲する所多し好益の書生弓馬を習はず徒に忠義を以て士心を激勵す冬至の日其の士卒を率ゐ行在を望んで四拜し終夜痛哭し一軍之れが爲に流涕す

賊兵全羅道を犯す金堤郡守鄭湛海南縣監邊應井力戰して之れに死す時に賊慶尙右道より全州の界に入る湛應井等之れを熊嶺に禦ぎ木柵を作つて横に山路を斷ち將士を督して終日大に戰ひ賊兵を射殺する事算なし賊退かんとす日暮に至り矢盡るに至る賊更に進んで之を攻む二人俱に死して軍遂に潰ゐ明日賊全州に至り官吏等逃走せんとす州人前典籍李庭鸞城に入つて吏民を勵まして固く守る時に賊の精銳多く熊嶺に死して氣已に倦挫せり監司李洸又疑兵を城外に設け壘は卽ち多く旗幟を張り夜は則ち



炬を列ねて山に滿つ賊城下に到つて環視すること數回敢て攻めずして去り悉く熊嶺の戰死者を聚めて屍を路邊に埋め數多の大塚を作り木を其の上に立て署して曰く朝鮮國の忠肝義膽を吊ふと蓋し其の力戰を嘉したるものなり是れに由つて全羅の一道獨り全し

八月初一日巡察使李元翼巡邊使李蓂等兵を率ゐて進んで平壤を攻む利あらずして退く時に元翼蓂と數千人を率ゐ順安に屯し別將金應瑞等龍岡三和甑山江西の四邑の軍を率ゐ二十餘屯を作つて平壤の西にあり金億秋水軍を率ゐ大同江の下流にありて以て掎角の勢を爲す是の日元翼等平壤の城北より兵を進めて賊の先鋒に遇ひ射て二十餘賊に中つ既にして賊大擧して來り軍士潰散し江邊勇力なる者多く擊傷せられ遂に還て順安に屯す

九月天朝の遊擊將軍沈惟敬來る初め祖承訓の敗るや賊愈々驕りて書を我軍に投ず群羊放二一虎一の語あり羊は天兵に喩へ虎は自詑す聲言して朝夕の間將に西に下らんと言ふ義州の人皆荷擔して起つ惟敬は本と浙の民

石尙書惟敬が素より倭情を諳んずることを思ひて遊擊將軍の號を假りて出し送れるなり既に順安に至る書を倭將に馳せて聖旨を以て責めて曰く朝鮮何の厮くる所あつてか日本に負くに至れるや日本如何なる故に擅に師旅を興すかと時に倭の軍中異變猝かに發して且殘毒甚しく人々恐怖し敢て惟敬が營を窺ものなし惟敬黃袱を以て書を包み家僕一人をして背に負はしめ馬に鞭つて直に馳せ普通門より入る倭將行長其の書を見て卽刻回報して曰く面接して事を議せんことを求むと惟敬將に往かんとするに人皆止む惟敬笑つて曰く彼れ何ぞ能く我を害せんと三四人の家僕を從へて之れに赴く行長義智玄蘇等と盛に兵威を陳ねて城北十里の外降福山の廳に會す我軍大輿山々頭に登つて望見すれば倭軍甚だ多く劒戟雪の如し惟敬馬より下り倭の陣中に入り群倭四面を繞つて圍む我軍皆惟敬が拘留せられんことを疑ふ日暮れて惟敬還る倭衆之れを送ること甚だ恭し翌日行長書を致して問ふて曰く大人白及の中にあつて顏色變せず日本人と雖ども比類少しと惟敬答へて曰く爾聞かずや唐朝に郭令公なる者有ること



を單騎にして萬軍の中に圍まれ曾て畏懼せず吾れ何ぞ爾を懼れんやと因て倭と約して曰く吾れ歸つて聖皇に此の由を報せん皇當に此の事の處分あるべければ五十日を以て期限となさんされば倭の衆は平壤の西北十里の外に出でゝ搶掠することなかれ朝鮮人もその十里の內にあつて倭と鬪ふこと勿れと乃ち地界に木を立て禁標と爲して去る我國の人能く惟敬が心を測る者なし

京畿の監司沈岱賊の爲に襲はれて朔寧に死す岱人となり慷慨變あつて以來常に憤々使を奉じて出入するや夷險を事とせず是の年の秋權徵に代つて京畿の監司となり行在より任地に赴き路安州を出づる時余と百祥樓の上に會見して國難を語ること慨然たり機を得れば直に親ら矢石を犯して賊に角せんと欲するなり余之を戒めて曰く古人云はずや耕は當に奴に問ふべしと君は書生にして陣に臨むは終に能くするものにあらず其處に楊州の牧使高彥伯と云ふものあり勇力にして善く鬪ふ君たゞ軍兵を收拾して彥伯をして之れに將たらしめば功あるべし愼で自ら將たること勿れ

と偕唯々として而も甚だ之れを然りとせず余又た其の孤影賊中に入るを見て軍官中の善く射る者幾州の人張某を分ちて俱に偕に從はしむ偕既に去つて數月の間京畿の人事を行在に啓し安州を經過するものある毎に未だ嘗て彼れの事を尋ねざるはなし余輙ち親しく其の人に京畿の賊勢及び監司のことを問へば對へて曰く幾何の殘害他道より甚しく賊日々焚掠するが故に乾淨の地とてもなく前監司及び守令以下は悉く深く躲れて難を避けその出づるときも從者儀式を減して微服潛に行き或は屢々厥の居を遷して一定せず以て賊患を避く然るに今現任の監司は殊に賊を畏れず巡行するとき先づ各邑に文書を送つて知悉せしむることこと平日の如く旗を連ね角を鳴らし而して行くと余之れを聞きて甚だ愛ふ依て書を送つて戒飾することこと前の如し然れども偕依然として變せず益々豪膽軍兵を聚集し以て悉く自ら從へて聲言して曰く京城を復せんと欲すと日々人を遣はして京中に入り內應する者を召募せんとす城中の人事定つて後ちに賊に附したるの罪を獲ん事を恐れ連署して狀を結び出でゝ監司に赴き自ら內應せ



んと言ふもの日に千百を以て數ふ或る者は約束に從つて軍器を輸送せんと曰ひ或る者は賊情を報せんと之等の人々往來することその間隙なき程なり中には亦賊の耳目となつて來つて動靜を察する者もありて出沒相雜りだれども偕之を信じて疑はず時に偕は朔寧郡にあり賊等之れを知り潛に大江を渡り夜之を襲ふ偕驚き起き衣を披ひて走り出づ賊追つて之を害す軍官張姓と云ふ者此の時同じく死す數日の後賊復た出でゝ其の首を取り鐘樓街の上に懸けしに日を經ること五六十日にして面色猶ほ生けるが如し京城の人その忠義を哀み相與に財物を率て倭の守兵に賂して之を贖ひ首函を江華に送る賊退て後尸身と共に還へして故山に葬らしむ偕は青松の人字は公望その子大復偕の子たるが故に朝廷之れに官を與へ縣監に至たらしむ

江原道の助防將元豪賊を龜尾浦に擊ちて之を殲すも又た春川に戰つて敗死す時に賊の大陣忠州及び原州にあり營を連ねて京都に達すその忠州にある者は路を竹山陽智龍仁に取つて往來すその原州にある者は砥平楊

根楊州廣州より京に抵らんとす元豪率つて驪州の龜尾浦に殲し利川府使邊應星又船に射手を載せ霧に乘じて賊を驪州の馬灘に邀へて射殺する事頗る多し是に由つて原州の賊軍遂に斷れたれば悉く忠州の路を取り而して利川驪州楊根砥平等の邑民にして賊の難に遇はざるもの皆以て豪が功なりとす巡察使柳永吉又た豪を遣して春川の賊を討たしむ豪頗る敵を輕侮するの意あり賊豪が將に來らんとするを知つて伏兵を設けて豪を待つ豪知らずして進み伏兵忽ち起つて豪を殺す是に於て江原の一道賊を禦ぐ者なし

訓鍊副奉事權應銖鄭大任等鄕兵を以て永川の賊を討つ之を破つて遂に之を復す應銖は永川の人膽勇あり初め大任と鄕兵千餘人を率ひ賊を永川に圍む軍士賊を畏れて進まず應銖數人を斬るに及び士氣奮ひ起り城を踰ねて入り賊と巷上に戰ひ擊ちて之に勝つ賊奔て倉中に入る者あり或は明遠樓に上るものあり我軍火を以て之を攻む賊悉く燒けて死す臭數里に及ぶ餘賊數十遁れて慶州に歸る是れより新寧義興安東等に據る所の賊皆聚



り爲に左道の郡邑保つを得たり偏に之れ永川が一戰の功なり

左兵使朴晉慶州を收復す晉初め密陽より奔つて山中に入る朝廷前の兵使李班城を棄てゝ奔り去るを以てその居所に捕へ之れを誅し晉を以て代つて兵使たらしむ時に賊兵充滿して行朝の聲聞南方に通せざること已に久し人心動搖して出る所を知らず晉兵便たるに及んで散民稍々集る守令山谷に隱れたりしが此の時復出でゝ事に涖み始めて朝廷あるを知る權應銖が永川を復するに及び晉左道の兵萬餘人を率ゐて慶州の城下に迫る賊潛に北門に出て軍後を襲ふ晉奔りて安康に還り夜又人をして城下に潛伏せしめ飛擊震天雷を發せしむ彈丸城中に入つて客舍の庭中に墮つ賊其の製法を知らず爭ひ聚つて之を觀て相共に推轉して諦視せしに俄然炮中より發して聲天地を震ひ鐵片星の如く碎け仆れて斃死する者三十餘人未だ中らざるものも亦顚倒して良々久しく起つ能はず皆驚愕せざる者なし其の製法を知らざるが故に神明なりとし明日遂に衆を擧て城を棄て遁れて西生浦に歸る晉遂に慶州に入つて餘す處の穀數萬石を得たり事陛下に聞

達す朝廷晋を嘉善に應銖を通政に大任を醴泉郡守に叙す震天雷の飛擊は古へその製法なし軍器等の火砲匠李長孫と云ふもの創めて案出す震天雷を取り大碗口を以て之を發す能く飛ぶこと五六百步地にして墜ち良久らくして内より發す敵最も此の物を畏る



# 懲毖錄卷之三

時に各道義兵を起し賊を討つもの甚だ多し全羅道にある者は前の判決事金千鎰僉知高敬命前寧海府使崔慶會とす千鎰字は士重兵を率ゐて先づ京畿に至る朝廷之を嘉して其の軍號を賜ふて倡義と曰ふ已にして駐まる能はずして江華に入る敬命字は而順と云ひ孟夷が子なり文才あり高卿兵を率ゐて郡縣に移檄し賊を討ち之と戰つて敗死す其子重厚代つて其の軍勢を領す名けて復讐軍と云ふ慶會後に慶尙の右兵使たり晋州に死す而して慶尙道に在る者は玄風の人郭再佑高靈の人前の佐郎金沔陜川の人前の掌命鄭仁弘禮安の人前の翰林金垓校書正字柳宗介草溪の人李大期軍威校正張士珍なり再佑は越の子にして頗る才略あり累ねて賊と戰ふ賊之を憚る再佑固く鼎津を守り賊をして宜寧の界に入るを得ざらしむ人以て再佑が功となす沔は故より武將世文が子なり賊を居昌手春峴に禦ぎ累ねて賊を却く事朝廷に聞ゆ擢でゝ右兵使たらしむ病みて軍中に卒す宗介兵を起

して未だ久しからずして賊に遇ひ死す朝廷其の志を嘉して禮曹參議を贈る士珍前後に賊を射殺すこと甚だ多し賊稱して張將軍と爲し敢てその軍威の界の中に入らず一日賊伏兵を設けて之を誘ふ士珍窮追して伏中に陷るも猶ほ大に叫んで力戰す矢盡き賊士珍が一臂を斷つ士珍獨り一臂を以て奮擊すると未だ已まずと雖ども遂に死す事朝廷に聞ゆ水軍郎公使を贈らる其の忠清道に在る者には僧人靈奎前の提督官趙憲前の清州牧使金弘敏庶孽李山謙士人朴春茂忠州の人趙德恭內禁衛趙雄清州の人李逢あり靈奎勇力にして善く鬪ふ憲と清州を復せしが後賊の爲に敗られて皆死す雄は最も勇敢なり能く馬上に起つて馳せ賊を殺すこと頗る多く遂に戰死す其の京折に在る者には前の司諫禹性傳前の正鄭叔夏水原の人崔珍高陽の人進士李魯李山斯前の牧使南彥經幼にして金琢を學ぶ前の正郎俞大進忠義衛李軼庶孽洪季男士人王玉季男最も驍勇なり其の餘の者も各々鄉里に聚ると或は百餘人或は數十餘人義を以て名となすもの擧げて數ふべからず而も記載する程の功績なし皆居を遷して日に叛くものゝみ又僧人惟政



と云ふものあり金剛の表訓寺にあり賊山中に入る僧皆走りしに惟政動かず爲に賊敢て逼らず或る者は合掌して敬意を表して去ると余安州に在り四方に檄し各々兵を起して難に赴かしむ檄文金剛山中に至る惟政佛を卓上に展べ諸僧を呼んで余の檄を證して流涕し遂に僧軍を起し西に赴いて勤王を唱ふ平壤に至る頃衆千餘人平壤城の東に屯し順安の軍と形勢を作爲す又宗室に湖城監あり百餘人を率ゐ行在にゆく朝廷秩を陞して湖城都正使とし順安に屯し大軍と勢を合さしむ其の北道にある者には評事鄭文季訓戎僉使高敞民等功最も多しと云ふ

李鎰を以て巡邊使となし李蘋を召して行在に還へす鎰初め江灘を守るや平壤既に陷り江を渡つて南して黃海道に入る安岳より海州に至り又海州より江原道の伊川に至り世子に從つて兵を募つて數百人を得たり賊平壤に入つて久しく出でず而して天兵將さに東走せんとするを聞き遂に平壤に還る陣を林原坪に結び一方平壤の東北十餘里にある義兵の將高忠鄉等と勢を連ね頗る斬獲する所あり而して李蘋順安にあり兵を進むる每に

轍ち北す撫軍司の從官皆鎰を以て誰に代へんと欲すれども獨り元帥金元命李蓍を主んじて撫軍司と論議協はず頗る相激の端あり朝廷余をして順安の軍中に往かしめ之れを鎮定調輯せしむ既にして朝議皆言ふ鎰は蓍に勝れりと又曰く天兵將に出んとす恐くは蓍任に勝へざらんことをと遂に鎰を以て之れに代ふ朴名賢代つて鎰が軍を領す而して蓍は行在に還る

賊諜金順良を獲ふ余安州より軍官成男を遣し傳令を持し密に約して進む事を水軍の將金億秋に通す時に十二月初二日也戒めて曰く六日の內に回繳せよと期過ぎて繳せず成男を追ふて之を詰る成男が云ふ已に江西に使すと軍人金順良還り來る故に順良を捕へ問ひて傳令何にか在ると其の人故に迷惑の狀をなし言辭を設けて遁ぐ成男が曰く此の人傳令を持し出でゝ數日にして軍中に還るや一牛を牽きて來り同伴の者と屠り食す人その牛の何處より來るやを問へば順良曰く之れ吾が牛にして家族の人に養はしめたるもの故に還つて取り來るのみと今其の言を聞くに蹤跡疑ふべし余始めて拷問に附して嚴しく之を鞭ちたるに乃ち實を吐いて曰く小人



賊の間諜となるその日傳令及び祕密の公文を受けて直に平壤に入り賊に示す賊將傳令を案上に置き公文は則ち見て卽刻扯裂せり賞として小人に牛を與ふと同じく間となる者に徐漢龍あり賞せられて紬五匹を受く約して更に外事を探る十五日にして來り報ずることを以てす故に出ることを聽さると余問ふて間を爲すもの獨り汝のみか他に幾人あるかと對へて曰く凡そ四十餘輩每に散つて順安江西の諸陣に出で以て蕭川安州義州に至り貫穿せざるなく事に隨つて轍ち報ずと余夫に駭き卽ち此のことを狀啓す又名を按じて急に諸陣に通じ之を捕へしめたるに或は得られ或は逸す順良を城外に斬る久からずして天兵至る賊知らず蓋し其の類駭き散じたるが故のみ茲に又事機の偶然たる天に非ざるは莫しと言ふべし

十二月天朝大に兵を發し兵部右侍郎宋應昌を以て經略となし兵部員外部劉黃裳主事袁黃を贊畫軍務となす遼東に駐る李如松大將たり三營將李如栢張世爵楊元及び南將駱尙志吳惟忠王必迪等を率ゐて江を渡る兵數萬餘なり是より先き沈惟敬既に去る倭果して兵を斂めて動かず既にして五

十日を過ぎて惟敬來らず倭之を疑ふ聲言して歳時將に馬に鴨綠江に飲はんとすと賊中より逃げ回る者あり皆曰く賊大に城を攻むるの具を修むと人益々懼る十二月の初め惟敬又至る再び城中に入つて留ること數日更に相好誓するあつて去り言ふ所を聞かず是に至つて安州に至り營を城南に下す旌旗器械整然に且つ肅然たる神の如し余提督に見參して事を白せんことを請ふ提督東軒に在つて入るを許す提督は乃ち傾然たる丈夫也椅を設けて相對するや余袖中より平壤の地圖を出して形勢を示し兵の從て入る所の路を指す提督耳を傾けて聽き輙ち朱筆を以て其の處に點す且曰く倭組鳥銃を特むのみ我れ大砲を用ゆ五六里を過ぎなば賊何を以てか當らんと余既に退く提督扇面に詩を題して余に寄せて曰く提兵星夜渡江干。爲說三韓國未安。明主日懸旌節報。纖臣夜釋酒杯歡。春來殺氣心猶壯。此去妖氛氣骨寒と談笑して敢て言ふ勝算にあらずやと夢中も常に征鞍に跨るを憶ふ時に城中漢兵皆滿つ余百祥樓に在る夜半忽ち唐人あり軍中の密約三條を持して來り示す其の姓名を問ふに告げずして去る提督副總兵査大受をし



て先づ順安に往かしめ倭奴を招いて曰天朝已に和を許す沈遊擊且つ至ると倭大に喜び玄蘇詩を獻じて曰く扶桑息戰服中華。四海九州同一家。喜氣忽消寰外雪。乾坤春早大平花と時に癸巳の春正月初吉也其の小將平の好官を して二十餘倭を領して出でゝ沈遊擊を順安に迎へしむ査總兵誘て與に酒を飲む伏兵起つて縱に之を擊ち平の好官を擒にして從ふ處の倭を斬戮して幾んど盡くす三人逃走して馳去る賊中始めて兵の至るを知つて大に援ふ時に大軍已に肅川に到る日暮れて正に營に下つて飯を做する報至る提督弓を彎き弦を鳴らし卽ち數騎を以て順安に赴く諸營陸續として進發す翌朝進んで平壤を圍みて普通門七星門を攻む賊城上に登つて紅白旗を竪て列ね拒ぎ戰ふ天兵大砲火箭を以て攻む砲聲地を震ふこと數十里山岳皆動く火箭は空に布き織るが如く煙氣天を蔽ふ箭城中に入つて諸々に火起り林木皆焚く駱尙志吳惟忠等親兵を率ゐて蟻附して城に登る前なる者は墜ち後れたる者は昇る退くものなし賊の刀槊城堞に下乘して蝟毛の下す天兵戰ひ益々力む賊支ふること能はず退て內城に入る斬戮焚燒して死す

る者甚だ衆し天兵城に入り內城を攻む賊城上に土壁を作り多く孔穴を穿つ之を望むに蜂窠の如し穴中より銃丸を亂發す天兵大に傷く提督窮寇の死を致すことを慮り軍を城外に收めて以て走路を開く其の夜賊氷に乘じて江を過て遁げ去る是より先き余安州にあり大兵將に出でんとするを聞き密に報じて黃海道の防禦使李時言金敬老をしてその歸路を迎へしむ之を戒めて曰く兩軍の沿道伏兵を設けて賊の過ぐるを俟てその後を追躡せよ賊飢困して遁走り戰ふの心なき故盡く傳に就くべしと時言卽ち來る敬老辭するに他事を以てす余又軍官姜德寬をして之を督せしむ敬老已むを得ず察中和に來る賊退く前一日因て黃海道の巡察使柳永雲關より還つて載寧に走る時に永雲海州に在り自ら衝んとす敬老賊と戰はんことを憚て避け去る賊將平の行長平の義智玄蘇平の調信等殘卒を率ゐて連夜遁げ還る氣沮み足勞れ跛躄して行き或は田間匍匐し尸を指して食ふ乞ふ我國一人の出でゝ擊つものなし天兵又之れを追はず獨り李時言其の後に尾き而も敢て迫らず組飢ゆる者病める者の後に落つる者六十餘級を斬る是れ是



時賊將の都城に在る者に平の秀嘉あり乃ち關白の姪或は言ふ婿なりと幼にして軍務を主事する能はず制は行長に在り清正は咸鏡道にありて未だ還らず若し行長義智玄蘇等擒に就かば卽ち京城の賊自ら潰ゑん京城潰ゑば清正の歸路斷絕せん然らば軍心胸懼して海に沿ふて遁走して自ら援ふこと能はず漢江以南の賊屯次第に瓦船せん天兵鼓を鳴らし徐に行て直に釜山に至り痛飲せんのみ須臾にして海內の山兵解肅清せられ安んぞ數年の紛々あらんや一夫意の如くならざれば事は天下に關る豈に痛惜せざるを得んや余狀啓して金敬老を斬らんと請ふ蓋し余平安道の體察使たり敬老は管下にあらず故に先つ之を請ふ朝廷宣傳官李純一を遣して標信を持して開城府に至り之を誅さんとす先づ提督に告ぐ提督か曰く其の罪は將に死すべし然れども賊未た滅びず一武士と雖ども惜むべき時なり姑く白衣にして軍に從はしめよ之れをして功を立てしめて罪を購ふも可なりと啓文を作つて純一に授けて送る

李鎰巡邊使を休めて更に李蘋之れに代る平壤の戰に天兵普通門より入

る李鎰及び金應瑞等は含毬門より入る兵を收むるに及んで皆退いて城外に屯す夜賊遁れ去る明朝始めて之を覺る李提督我軍の警備せずして賊を遁れ去らしむることを咎む是に於て天將の曾て順安に往來するものにて李蓍と相熟するもの爭て言ふ鎰は將才にあらず獨り李蓍可なりと提督依て狀を作る朝廷左相尹斗壽をして平壤に至り鎰か罪を問ひ軍法に行はんとす良久しくして之れを釋し更に蓍を以て鎰に代へ兵三千餘騎を選み提督に從へて南す

提督兵を坡州に追て賊は碧蹄の南に戰ふ利あらずして還り開城に屯す初め平壤既に復して大同の以南沿道の賊屯皆遁け去る提督賊を追はんと欲して余に謂つて曰く大軍將に前進す前路に糧草なしと聞く議政既に大臣たり當に國事を念ふべし勞を憚るべからず宜しく急に行て軍糧を準備すべし疎誤を致す勿れと余辭して出づ時に天兵の先鋒已大同江を過て南す蓍槍道を塞ぎて行くべからず余委曲して疾く行き軍前に出て夜中和に至る黃州に至れば既に三鼓なり時に賊兵新に退き一路盧し荒して人民未



だ集らず計の出る所を知らず急ぎ黃海道の監司柳永慶に移文して之をして催促して糧を運ばしむ又平安の監司李元翼に移文して金應瑞等か率ゆる所の軍人の戰陣に堪へざる者を調發して平壤より負ひ扶して退隨せしめ送つて黃州に至る又舡を以て平安道三縣の穀を運ばしめ靑龍浦より黃海道に運輸す事豫め辨じたるにあらず時に臨んで猝に急ぎ大軍間もなく至る軍興の宜しからんことを恐る之れが爲に心を勞し思を焦す永慶頗る儲峙あり賊を畏れて山谷の間に隱し置き民を督して輸送して沿道に至れば闕免に至らず既にして大軍開城府に入る正月二十四日賊我民の之か內應を爲さんを疑ひ且平壤の敗を怒つて盡く京城々中の庶民を殺して公私の閭舍を焚き殆んど燒き盡す西路に屯を列ねる賊皆京城に會して王師を拒かんとす余連りに請ふて提督速に進めと提督遲回逡巡すること日を累ぬ進んて坡州に至る翌日副總兵查大受我か將高彥伯と兵數百を領して先行を偵察す賊と相遇ふて碧蹄の南礪石嶺に戰ひ斬獲百餘級なり提督之を聞いて大軍を留め獨り家漢の騎馬の者千餘騎と馳せて之れに赴き惡陰嶺

を過ぐ馬蹶て身地に墜つその麾下の者共に之れを扶け起す時に賊大兵を礪石嶺の後に匿す其の數數百人丈は嶺上に在り提督望み見て其の兵を別て兩翼となして進む賊亦嶺より下り漸く相遇ふ後賊山後より遽に山に上る陣幾んど萬餘天兵を見て心大に懼る而も已に及を接したる故に中止すべからず時に提督の所領は皆北騎にして火器なく只短劍の鈍劣なるを持つのみ賊は步兵を用ひ又も亦皆三四尺銳利なること比なく之れと突き鬪ふや左右に揮ひ擊て人馬皆斃れ散て其の鋒先に當る者なし提督勢の危きを見て急き後軍を徵す未だ至らざる先に軍已に敗れ死傷甚だ多し賊兵を收めしめて急退せず日暮る提督坡州に還る其の敗を隱すと雖とも神氣沮喪すること甚し夜家僕の親近信賴せるもの戰死したるを以て痛哭し明日軍を東坡に退けんと欲す余右議政俞泓元師金命元と李蓂等を帥ひて帳下に至る提督出てゝ帳外に立ち諸將左右に立つ余力爭して曰く勝負は兵家の常事なり當に勢を觀て更に進むべし奈何んぞ輕しく動かんと提督曰く吾軍昨日多く賊を殺す不利の事にあらずたゞ此の地雨降りたる後にして



泥濘軍を駐むるに便ならず故に東坡に還り兵を休め更に進んで取んと欲するのみと余及び諸人之れを爭ふこと固し提督出て已れか秦木草を示す其の中に曰へるあり賊兵都城にある者二十餘萬衆寡敵せずと後に又曰く臣病甚し請ふ他人を以て其の後に代へんことをと余駭して手を以て指默して曰く兵甚だ少し何ぞ二十萬とあることあらんやと提督曰く我豈能く之れを知らんや乃ち汝か國人言ふことは蓋し事に託けるの辭なりと諸將の中張世爵最も提督の兵を退けんことを勸め余等が固く執つて爭ひ退かざるを以て巡邊使李蓂を蹴り叱咤して退け聲色俱に勵す是の時大雨連日降りて且賊路邊の諸山を燒き皆禿山となりて藁草を止めず重るに馬疫を以てすること數日の間にして倒殞する者殆んと萬餘匹に達せんとす是の日三宮還つて臨津を渡り東坡驛に陳す明日東坡より又開城に還らんとす余又力爭して曰く大軍一たび退かば賊氣愈驕り遠近驚駭せん臨津以北も亦得べからず願くは少らく留つて以て動かん提督伴つて之れを許す余退くや提督馬に跨つて遂に開城府に還る諸營悉く開城に退き獨

り副總兵査大孚遊擊毎承宣の軍數百にして臨津を守る余猶ほ東坡に留る日々人をして兵を進めんことを請はしむ提督卽ち曰く天晴れ路乾かば則ち當に進むべしと然れども眞に進むの意なし大軍開城に至ること日久しくして軍糧已に盡くたゞ水路より粟及び菱草を江華より取り又船にして忠淸全羅兩道の稅糧を輸送せしむ稍々あつて至るも到著すれは盡き盡くれは又到るを待つの有樣にして其の勢益々急なり一日諸將糧盡くるを以て辭となして請ふに提督に師を旋さんことを以てす提督怒る全及戶曹判書李賊中京畿道の左監司李廷馨を呼んで庭下に跪かしめ大聲に詰責し加ふるに軍法を以てせんとす余膝を屈して謝して已まず國事の因て此處に立ち到れるを思ひて覺わず涙涕す提督愍然として更に諸將に怒つて曰く汝等若し我れに隨つて西夏を征せしとき軍食せざること累日なれども猶敢て歸らんことを言はずして卒に大功を成す今朝鮮偶々數日支へざれば乏て何ぞ敢て遽に師を旋さんと言ふや汝等去らんと欲せば則ち去れ我れ賊を滅さずんば還らずたゞ馬革を以て尸を裹むべきのみと諸將皆頓首し



て謝す糧船數十隻江華より後西江に泊り僅に事なきを得たり是の夕提督は總兵張世爵をして余を召して慰め且つ軍事を論ず

提督平壤に還る時に賊將淸正尙ほ咸鏡道に在り人有りて傳へて言ふ淸正將に咸興より陽德孟山を踰ゑ平壤を襲はんとすと時に提督北に還るの意ありしも未だ其の機を得さ淸しが此れに因て聲言すらく平壤乃ち根本なく若し守らずんば大軍の歸路なくして救ふべからずと遂に軍を回して平壤に還る王必迪留つて開城を守る接伴使李德馨に謂つて曰く朝鮮の軍勢孤にして援なし宜しく悉く江北に還るべしと此の時全羅の巡察使權慄高陽より幸州の巡邊使李蓍坡州に在り高彥伯李時言等蝟蹤嶺に在り元帥金命元臨津の南に在り余は東坡にあり提督賊の爲に乘せられんことを恐れて然か言へるなり余從事官辛慶晋をして馳せて提督に會見して軍を退くべからざるの五箇條を陳べしむ先王墳墓皆畿甸にありて賊屢沈淪するが故に神人共に切に棄て去るに忍びずとなす一なり京畿以南の民日に王師を望む忽ち退去するを聞かば復志を固する能はずして皆相率きて賊に

歸せん二なり我國の境土尺寸も容易に之を捨つべからず之れ三なり將士力弱しと雖ども將に天兵に倚つて共に進み取るを圖る一たび撤退の令を聞かば皆必ず怨憤して離散せん之れ四なり一たび退いて賊その後に乘せば則ち臨津以北と雖ども亦保つ可からず五なりと提督默然として去る

全羅道の巡察使權慄賊を幸州に敗り軍を坡州に移す是より先き慄光州の牧使を以て李洸に代つて巡察使より兵を率て勤王を唱ふ李洸等野戰して敗れ水原に至り禿城山城に據り敢て攻めず乃ち天兵將に京城に入るを聞いて江を渡つて幸州山上に陣す是に至つて賊京城より大に出てゝ之を攻む軍中回懼して散せんとす江水後に在り走るに路なく已むを得ずして還つて城に入り力戰す矢雨の如く下る賊三隊に分れて交々進む皆敗る會々日暮れて賊還て京城に入る慄軍士に令し賊の屍を取り肢體を磔裂して林木に散らし掛けて以て其の憤を泄らす既にして賊更に出てゝ必ず報せんことを期すと聞いて甚だ懼れ營柵を毀ち軍を率ゐて臨津に至り都元帥金命元に從へり余之を聞て單騎馳せ去り坡州山に登り形勢を觀て思へら



く大路の衝に當つて地形斗絕す之れ據るべしとなし卽ち權慄と巡邊使李蓍とを軍を合せて據守し以て賊兵の西に下るを遏めしむ防禦使高彦伯李時言助防將鄭希玄朴禾賢等遊兵となつて蟹踰嶺を遮り義兵の將朴惟仁尹光正李山輝等右路より敬昌陵の間に伏して各々其の兵を以て出沒抄擊す賊多く出づれば則ち避けて戰はず少く出つれば則ち隨處に邀擊す是より賊城を出てゝ樵採すること能はず馬死する者甚だ多し又倡義使金千鎰京畿の水使李蓍忠淸の水使丁傑等をして舟に乘り龍山の西江により賊の勢を分たしむ忠淸道の巡察使許頊陽城に在り還り本道を守り以て賊の南を衝くの勢に備へしむ京畿忠淸慶尙の官義兵に移文して各々其の處に在りて左右より賊の路を邀截せしめ根楊の郡守李汝讓をして龍津を守らしむ凡そ諸將の斬る所の賊の首は皆開城の南門の外に掛く提督叅軍呂應鍾之れを見て喜んで曰く朝鮮人今卽ち賊の首を取ること毬を割くが如し一日賊東門より大に出て山を搜す楊州積城より大灘に出てゝ得る所なし查大受賊の來り襲はんことを恐れて余に報して曰く體探の人あり來つて賊の

査總兵柳林察を得んと欲すと言ふ姑らく開城を避けんは如何にと余之れに答へて曰く體探人の言ふ所恐らくは此の理なからん賊方に大軍の彼の兵に近く往かしむることを疑ふゆへに豈敢て輕々しく江を渡らんや我等一たび動かば則ち民心必ず動かん如かず靜かに以て之れを待たんにはと査笑つて曰く此の言甚だ是し假令賊在りとも吾と體察と死生を同うせんに豈敢て獨り去らんやと遂に率きひる所の勇士數十餘人を分ち來て余を護り雨甚しと雖とも徹夜警守して暫くも怠らず賊の城に入るを聞くに至つて乃ち罷む其後賊權憑の坡州に在るを探り知つて怨を報せんとし大軍を率きて西路より出てゝ廣灘に至り山城を去ること數里兵を駐めて進まず午より未に至つて攻めずして還り退き後復ひ出です蓋賊地形を知り憑の據る所險絶なるを見るが故のみ余書を王必迪に檄して言ふ賊方に險に據るが故に因て未だ攻め易からず大兵當に進んで東坡に往く坡州その尾を躡ふて以て之れを牽綴し南兵一萬を選み江華より漢南に出でゝ賊の不意に乘じ諸屯を擊ち破らば則ち京城の賊は歸路を斷絶せられて必ず龍津



に走らん因て後兵を以て之れを江津に覆さば一舉にして掃滅すべきなりと必迪節をたゝいて奇策とす偵探軍三十六名を發して忠淸道に馳せ往かしむ義兵の將李山謙の陣賊の形勢を視察す時に賊の精兵皆京城にありて後屯は皆羸疲脆弱なり偵卒踊躍して還て報じて云ふ一萬を頒たずとも只二三千をして破るべし李提督は北將なれば是の役や痛く南軍を抑へ其の功を成すを恐れて許さず

軍糧の餘票を出して飢餓に頻する人民を救はんことを請ひ許さる時に賊京城に據つて已に二年鋒焰を被る所實に千里蕭然たり百姓耕種するを得ずして餓死殆んど盡きんとす城中の餘民余が東坡にあるを聞いて老弱を扶け病者を荷つて來る者數を知らず査總兵馬山の路中に小兒の匍匐して死母の乳を飲むを見て哀み之を收容して軍中に育つ余に謂つて曰く倭賊未た退かずして人民斯くの如し將に奈何せんと乃ち嘆息して曰く天愁へ地慘むと余之れを聞いて覺わず流涕す時に大兵將に再び至らんとす糧船の南方より來らんとする者皆江岸に列泊して敢て他に適かず全羅道の

召募官安敏學皮穀千石を募り得て船に運んで至る余の喜び甚しく卽ち狀啓して之れを以て飢餓の民を賑さんとして前の郡守南宮悌を以て監賑官となし松葉を取つて屑となし松屑十分每に米屑一合を合せ水に投じ以て之れを飲ましむ人多くして數少く活きること幾んとなし唐將も亦之れを哀れみ自ら食する所の軍糧三十石を分ち給して之を賑はす而も百分の一に及ぶ能はず又日夜大雨降る飢餓の民余が左右にあつて哀み呻きて聞く に忍びず朝廷之れを見て狼藉とし死する者甚だ多し慶尙の大道監司金聖一も亦前典籍李魯を遣はして急を余に告げ曰く全羅左道の穀を徵發して飢餓の民を賑し且つ春期の種子となさんと而も全羅の都事崔鐵堅貸して民を賑することに肯せず時に知事金瓚體察副使たり湖西にあり余卽ち瓚に檄して全羅に馳せ下り自ら南原等の倉を開ひて一萬石を嶺南に移し以て民を救はしむ大抵京都より南邊に至る賊兵橫に奪ふ時方に四月民皆山に登り谷に入り一の麥を種する處なし若し賊をして更に數月の間退かざらしめば則ち生類盡きんとす、



沈遊擊惟敬再び京城に入る賊誘つて兵を退く四月初七日提督兵を率きて平壤より開城府に還る是より先き金千鎰が陣中に李薑忠なる者あり自ら請ふて京に入り賊情を探る二王子及び長溪君黃廷彧等を見て還り之れを告ぐ賊講和の意ありと既にして賊書を龍山の舟師に投じて和を乞ふ千鎰其の書を余に送る余念ふに提督已に戰意なし或は此れを假つて賊を却けんには則ち未だ必ずしも更に開城に還つて事を了るに近かゝらずんばあらず其の書を查大學に示す卽ち家僕李慶を馳せて平壤に報せしむ是に於て提督又惟敬をして來らしむ金命元惟敬を見て曰く賊平壤に欺かるゝを怒る必ず善意あらざるものあらん何ぞ更に危地に入らんやと惟敬が曰く賊自ら速かに退かざるが故に敗る何ぞ我れの預り知る者ならんやと遂に入つて賊中に在り惟敬が言ふ處聞くすと雖ども概ね王子陪臣を還すを以て責め還て釜山に軍して然る後に和を許さんと云へるが如し賊約束を奉せんと請ふ提督遂に開城に還る余文を提督に呈し言を極めて和好するは計にあらず之れを擊つに如かざるを語る提督批示して曰く此れ先づ我

が心と同じく然りとする所のものを得たりと然れども提督余が言ふ處を聽用するの意なし又遊擊將軍周弘謨をして賊の營に往かしむ余金元帥と適々權慓が陣中にありて坡州に還へり弘謨余等をして入つて旗牌を參ふ余が曰く此れは是れ倭の營に入るの旗牌なり我れ何ぞ參拜せん且つや宋侍郎は賊を殺すを禁ずるの牌文を有す最も民愛すべからざるなりと弘謨之れを强ゆること三四回余答へずして馬に騎つて東坡に還る弘謨人をして提督にかの狀を言はしむ提督大に怒つて曰く旗牌は卽ち皇命なり犬子と雖ども見れば轍ち之を拜す何すれぞ拜せざる我軍法を行つて然る後に軍を引き還さんと接伴使李德馨急に余に報じて曰く明朝來つて罪を謝せざるべからずと明日余金元帥と開城に往く門に詣つて名を通ず提督怒つて會はず金元帥退かんと欲す余は曰く提督應に余を試むべし姑く之れを侍てと時に少しく雨降る余等二人門外に拱立す須らくあつて提督の人門を出てゝ覘ひ視て而る後入つて俄に再び入ることを許す提督堂上に立つ余前に就き禮を行つて卽ち謝す曰く小的甚だ愚劣と雖ども豈旗牌の敬す



べきものたるを知らざらんやたゞ旗牌の傍に牌文ありて我國人の賊を殺すを許さずと記す私心窃に之れを痛むが故に敢て參拜せざるなり罪素より免るべからずと提督慙色あり乃ち曰く此の言甚だ是し牌文は卽ち宋侍郎が命にして吾が事に關せずと因て曰く此の間流言甚だ多し侍郎若し陪臣の旗牌に參せずして而も我れ之れを容して罪を問はずと聞かば則ち必ず我れを責めん須らく爲に文を呈し畧々事情を辨じて來り脫れよ侍郎問ふことあらば吾此を以て之れを解かん問はずんば則ち之れを捨て置けと余等二人拜辭して退き依て言ふ所の如く文を呈す此より提督人をして倭の陣に往來相續かしむ一日余元帥と往て提督に仕候し東坡に還り天壽亭の前に到る查將が家僕の東坡より開城に入るに出遇へり馬上相揖して過ぎ招賢里に至る漢人三騎あり後より來つて喝問して體察何處にか在ると余之れに應ねて曰く我こそ是なりと叱して馬を回へす一人手に鐵鎖を持ち長鞭を以て余が馬を亂撞して曰く走れ走れと余何の事たるやを知らず只馬を回へして開城に向つて走る其の人馬の後に從つて之を鞭つて已ま

ず從者後に落て獨り軍官金霽從事辛慶晋力を盡して追隨する、を得たり青郊驛を過ぎ將に土城の隅に至らんとす又一騎あり城内より馬を走らして來る三騎に謂つて曰く云々なりと是に於て三騎余に揖して曰く去るべしと余恍然何事なるやを測らずして回る翌日李德馨が通知に因て始めて之れを知る卽ち提督が信任する家僕外より入つて提督に柳體察和を請せんと欲せず悉く臨津の船隻を去り使をして倭の營に通せしむる勿れと言ふ提督は遽に怒て命じて余を拿ゑて梱打四十ならんと欲す余が未だ至らざるに當てや提督目を瞋らし臂を奮つて或は坐し或は起ち左右の者皆慓ふ頃らくあつて李慶至れり提督臨津に船ありや否やを問ふ慶が曰く船ありて往來絶ゆることなしと提督卽ち人をして余を追ふ者を止めしめ家僕安言すと謂つて痛く打つこと數日氣絶するに至りて曳き出しその余を怒ることを悔いて人に謂つて曰く若し體察使到來せば吾當に何を以てか之れに處すべきと蓋し提督常に余が和議を欲せざるを思ひ素より不平の心あり故に幾かに人の言を聞いて復た省察せず暴怒すること此の如し人皆余



が爲に之を危む後數日にして提督又遊擊戚金錢世禎の二人をして旗牌を以て東坡に至り金元帥李觀察廷馨を招ひて同坐せしめ因て從容として賊王子と陪臣を出して京城を退き去らんとを請へる由を言ひ今當にその請ふ所に從つて賊を欺いて城を出し然る後に計を行つて追勦せんとすと言ふ、之れ乃ち提督之れによつて來つて余が意の肯否を探らしむるなり余猶前議を執り往復して已まず世禎性躁急にして怒を發し大に罵つて曰く然らば則ち爾が國王何を以てか城を棄て遁竄するやと余徐に國を遷し存を圖るも亦或は道の一なりと曰す是の時戚金たゞ數々余を視て世禎と假笑して言ふことなし世禎等遂に回る、四月十九日提督大軍を領し東坡に至れり査總兵が幕に宿る蓋し賊既に兵を退けんとを約するが故に將に京城に入らんとする也余提督が居る處に詣で侍候せんことを乞ふ提督會見せずして譯者に隅つて曰く體察使は予を快とせず亦た來り問ふの理由なしと

四月九日京城復す天兵城に入る李提督小公主宅に館す小公主宅は後に南別宮と稱したるものなり、前一日賊已に城を出づ余隨つて城に入り城中

を見るに遺民百に一も存せず其の存するものも皆飢羸疲困面色鬼の如し、時に日光直射して氣烘熱し人死し馬死するもの處々に暴露し臭穢城に滿ち行く者鼻を掩ふ方に公私の盧舍を過ぐるに凡て空しく獨り崇禮門より以東南山の下より循つて一帶の賊の止つて舍營とする所のみ稍全し、宗廟三闕及び鐘樓各司館學の大街北此にある者は蕩然として惟た灰燼を餘す余先づ宗廟に至つて痛哭す次に提督の居處に至り會見して問候するに諸臣號慟すること稍々久し、明朝更に提督の門下に至つて起居を問ひ且賊兵總かに退去して此處より遠からざるべし願くは軍を發して急ぎ追はんと言ふ、提督曰く吾意も固より然り急ぎ退ざる所以のものは漢江に船なきが故のみと余が曰く若し老爺追はんと欲せば先づ江面に出でゝ舟艦を整備すべしと提督曰く甚だ善しと余漢江を出て是より先き余文を右監司成泳水使李蘋に遣り賊をして去て急に江中の大小の船を收めしめ失ふこと勿かうしめ俱に漢江に命せよと是の時船已に到る者八十隻なり余人をして提督に船已に辦ずと報せしむ頃らくして營將李如栢萬餘兵を率ゐて江上



を出で軍士半ば渡る日已に暮れんとし如栢忽ち足の疾めることを稱して乃ち曰く當に城に還り疾を醫して進むべしと轎に乘じて回る、已に漢南にあり軍皆還渡りて城に入る、余心を痛むること斯くの如きはなし蓋し提督實に賊を道ふの意なしたゞ諉りに辭を設けて僞り余が言に應ずるのみ二十三日余遂に病臥す』

五月李提督賊を追ふて開慶に至つて回る宋侍郎始めて牌文を提督に發し之をして賊を追はしむ時に賊去つて已に數十日侍郎人の已が賊を縱つて追はざるを議せんとを恐る故に此の如き暴止をなして以て之れを示す其の實は賊を畏れて敢て進まずし回りしなり賊途にあつて緩々として去り或は留り或は行く賊退いて分れて海邊に屯す鼎山西生浦より東萊金海熊川巨濟に至つて首尾相連ること凡そ十六屯皆山に據り海に憑り城を築き塹を堀り久しく留まるの計を爲して敢て海を渡らず天朝又泗川の總兵劉綎をして禰建西蜀南蠻等に召募したる兵五千を率ゐて繼いで星州八莒に屯す南將吳惟忠善山鳳溪に屯す四面を環つて相持して進まず粮糧は之

れを西湖に取り險阻を踰へて諸陣に給す民力爲に困しむ提督又沈惟敬を
して往て倭に諭して海を渡らしむ又徐一貫謝用梓をして那右邪に入つて
關白に會見せしむ六月賊始めて兩王子臨海君順和君及び宰臣黃廷彧黃赫
等を還す沈惟敬をして歸つて之れを報せしむ而して一面には進んで晉州
を圍み聲言して前年賊敗るゝの怨を報ずと蓋し賊壬辰に晉州を圍み牧使
金時敏之れを禦きしより克たずして退く故に然か云へるなり八日にして
城陷る牧使徐禮元判官成守璟倡義使金千鎰本道の兵使崔慶會忠淸の兵使
黃進義兵復讎の將高從厚等皆死す軍民死する者六萬餘人牛馬鷄犬をも遺
さず賊皆城を夷け壕を塡め井を堙め木を刈つて以て前憤を晴らす時に六
月二十八日なり初め朝廷賊南に下ると聞て連りに旨を下し諸將を督して
賊を追ふ都元帥金命元巡察使權慄以下の官義兵皆宜寧に聚る慄幸州の捷
に狃れて岐江を渡り前進せんと欲す郭再佑高彦伯曰く賊勢方に盛なり我
軍多く烏合にして戰に堪ゆる者少し前頭又粮粕なく輕々しく進むべから
ずと聞くもの唯々とするのみ李蓍が從事成好善駅にして事を曉らず臂を



揮つて諸將の逗遛することを責め權慄と議合し遂に江を過ぎて進んで咸
安に至る城空くして得る處無し諸軍食に乏して靑柿の實を摘みて以て食
す復た聞その意無し明日諜報じて賊金海より大に至ると衆或は言ふ當に
咸安を守るべしと或は言ふ退て鼎津を守らんと紛紜として決せず賊の砲
聲を聞て人々恐懼し爭つて城を出て橋より墮ちて死するも甚だ多し還つ
て鼎津を渡り賊兵を望見すれば水陸より來り野を蔽ひ川を塞く諸將各自
に散り去る權慄金命元李蓍崔遠等先づ全羅道に向ひ惟く金千鎰崔慶會黃
進等は晉州に入る賊隨つて至り之れを圍む牧使徐禮元判官成守璟は唐將
支待差使員をして久して尙州にあらしむ賊本州に向ふと聞き狼狽して還
る總に二月なり州城本と四面險に據る壬辰の時東面に移り下て平地に就
く是に至つて賊飛樓八座を立て城中を俯瞰して城外の竹林を刈りて大束
となし環列して自らを蔽ふて以て矢石を防ぎ其の內より鳥銃を發するこ
と雨の如し城中敢て頭を出さず又千鎰の率ゆる者皆京城市井に召募する
所の徒千鎰又兵事を知らずして自ら用ゆること太甚し且素より徐禮元を

惡む主客相猜み號令乖違す因て以て甚しく敗らるたゝ黄進東城を守つて戰ふこと數日賊蟻附して入る城内の人方に荆を束ね石を投じ力を極めて之れを禦ぐ賊幾んど却く千鎰が軍北門を守る意ふに城已に陷るとして先づ潰ゆ賊山上にあつて軍の潰ゆるを望見して一たび擁して擊ち諸軍大に亂る千鎰蹈石樓に在り崔慶會と手を携へて痛哭し江に赴いて死す軍民脫れ得たるもの數人のみ倭の變あつて以來人の死すること未だ此の戰の如く甚しきは有らず朝廷千鎰が義に死するを以て贈るに崇秩議政府右贊成を以てす權慄敢て戰ひ賊を畏れず命元に代つて元帥となる劉總兵綎晋の陷ると聞き八莒より馳せて陜川に至り吳惟忠鳳溪より草溪に至り以て右道を守る賊亦既に晋州を破つて釜山に還る聲言して天朝の和を許すを待ちて乃ち渡らんと言ふ

十月車駕都に還る十二月天使行人司の行人司憲來る、是より先き沈惟敬倭將小西飛を狹つて關白の降表を持して歸る天朝降表の關白より出るに非らずして行長等の詐とて之れを爲るを疑ひ又總に至つて晋州陷るを見て納款の意誠にあらずとす小西飛を遼東に留めて久しく報せず提督及び諸將皆還り去りたゝ劉綎吳惟忠王必迪等か餘兵八莒に駐劄す而して中外飢衰し且饋運に困み老弱溝壑に轉落し壯者は盜賊を爲し重るに癘疫を以てす死亡して殆んど盡きんとし父子夫婦相食み骨を暴らすこと莽の如し而して未だ幾ならずして劉が軍八莒より南原に移り之より又都城に還り留ること十餘日逡巡して西に去る賊猶海上に在り人心益々恐る是に於て經略宋應昌劾せられて去り新經略顧養謙代つて遼東に至り參將胡澤をして節を以て付し來つて我が群臣を諭す其の略に言ふ倭奴端なく爾を侵すこと勢破竹の如く王京開城三都會に據つる爾の土地人民を有つこと十に八九爾の王子陪臣を虜にす皇上赫怒して師を興し一たび戰つて平壤を破り再たび進んで開城を得たり倭奴遂に王京を遁れ王子陪臣を送還し地を復すること二千餘里費す所の帑金計るべからず士馬の物故するも亦少からず朝廷の屬國に待つ所の恩義此處に止る皇上罔極の恩も亦已に過ぎたり今餉已に再び運ぶべからず兵已に再び用ふべからず而も倭奴亦畏れて

降を請ひ且つ封貢を乞ふ天朝正に宜しく之れが封貢を許し之れを容して外臣となし倭を驅つて數を盡さば海を渡つて復た侵さゝるべし爾が禁を解き兵を息むるは爾が國の久遠の計を爲す所以なり今爾の國糧盡き人民相食む又何を恃んで兵を請ふか既に兵餉を爾の國に與ふず又封貢を倭奴に絕つ倭奴必ず怒を爾の國に發して爾の國必ず亡びん安んぞ早く自ら計を爲さゝるべき昔し勾踐の會稽に困むや豈に夫差の肉を食ふを欲せざらん而も姑く恥を忍び詬を含むを待つわればなり身且臣たり妻且妾たり況んや倭奴の爲に臣妾を中國に爲すことを請ひ以て自ら寬るして徐に之れが圖をなさば是れ勾踐が君臣の謀に愈れり是れにして忍び能ずんば是れ悻々たる小丈夫のみ讎を復し恥を雪ぐの英雄にあらず爾倭の爲に封貢を請へ若し果して請ふことあらば則ち倭必ず益々中國に感じ且つ朝鮮を德とし必ず兵を罷めて去らん倭去つて爾の國の君臣遂に心を苦め思を焦し臥薪嘗膽以て勾踐の業を修せば天道還ることを好む安んぞ倭に報するの日無きを知らんやと其の言縷々として千百大意は此の如し胡澤館に在る



こと三月餘朝議決せず聖意愈之れを難しとす臣時に病を以て告ぐるにより啓して曰く封を請ふは義として固と不可なりたゞ當に詐はる近日の事情を具して奏聞し以て中朝の處置を聽くべしと故に啓して乃ち充る是に於て陳奏使許項去る時に願經略又人の言を以て鮮し去る新經略孫鑛來り代る兵部奏請して小西の飛を收めて京に入れ詰るに三事を以てせしむ一はたゞ封を求めて貢を求めず二は一倭も釜山に留むる勿れ三には永く朝鮮を侵す勿と約の如くせば卽ち封じ約の如くせずんば許さずと小西の飛天を指し誓をなし約束に違はんことを請ふ遂に沈惟敬をして西に小西の飛を帶びて倭營に入れて宣諭し又李宗誠楊方亨をして上副使となし往て平秀吉を日本國王に封せしめ而して又宗誠等をして我が都城に留め倭の盡く撤するを候はしむ乙未四月宗誠等漢城に至り連りに使を遣して倭を促して海を渡らしむ項背相望む是に於て倭先づ熊川の數陣及び巨濟場門蘇津浦等の諸屯を撤して以て信を示す且曰く恐くは平壤の如く欺かれん願くは天使速に倭營に入り當に悉く約の如くすべしと八月楊方亨兵部の

節付に因て先づ釜山に至る倭遷延して卽刻盡く撤せず更に使を上すことを請ふ人多く之れを疑ふ兵部尙書石星沈惟敬が言を信じ意ふに倭異情なしと又急ぎ兵を退けんことを屢々宗誠に促して前み去らしむ朝議異多くして而も星奮然ととして身を以て之れに當る九月宗誠續て釜山に至る平行長卽ち來り見にず又將に關白に往復し議定て然して後天使を迎へんとすと言ふ行長日本に入る丙申正月始めて廻るに猶ほ明かに兵を撤することを言はず沈惟敬二使を留め又獨り行長と先づ行きて海を渡る託言して將さに使を迎へるの禮節を講定せんとすと人その意を測るなし惟敬錦衣して舟に登り旗上に調戢兩國の四字を大書し船頭に立てゝ去る旣に走つて久しく回報なし李宗誠は乃ち開國の功臣文忠の後功を以て爵を襲ぐ紈絝の子弟性頗る恇怯或る人宗誠に言つて倭の會實に封を受くるの意なし將に宗誠等を誘致して拘囚して之れを困辱すべしと宗誠懼るゝ甚し夜半微服して營を出て盡く僕從輜重卯節を棄てゝ逃ぐ翌朝倭始めて覺り道を分つて之れを追ふ梁山石橋に至り得ずして回る楊方亨獨り倭營に留り群



倭を撫戢し且我國に移文して慫慂するなからしむ宗誠は竄るに大路に由らず山谷の中に入り食ざること數日慶州より來つて西に去る旣にして沈惟敬行長始めて廻る又西生浦竹島等の屯を撤す其未だ撤せざる者は只釜山の四屯なり乃ち楊副使を拜んで海を過ぐ沈惟敬又我が使を要して同行す其の姪沈懋時をして從ひ發せしむ朝廷肯せず懋時必ず與に俱にせんと欲して已むを得ず武臣李逢春等を以て跟隨の陪臣等と稱して以て之れに應ず或は人謂ふ武人彼處に往かは卽ち失誤多からん宜しく文官の事理を識るものをして往かしむべしと、時に黃愼沈接伴使をして倭營に在て就て愼をして隨行せしむ

天使楊方亨沈惟敬日本より回る先きに方亨等日本に至る關白館宇を盛飾して迎接せんとす會々一夜地大に震ひ家屋推け倒れて幾んと盡く遂に屯余に迎候し兩使と一二回會す初めは封を受くるものゝ如く然りと言ひ、忽ち大に怒つて曰く我れ朝鮮の王子を放還す朝鮮當に王子をして來り謝せしむべし而も使臣秩卑するは是れ我れを謾るなりと黃愼等命を傳ふる

ことを得ず竝に楊方亨沈惟敬等を促して同じく回る亦恩を天朝に謝する
の禮なし、賊將平の行長釜山浦に回る清正復た兵を率きて機て西生浦に屯
す聲言すらく王子の來り謝するの後始めて兵を解かんと蓋し關白求むる
所甚だ大にして封貢に止まらず中朝封を許して貢を許さず沈惟敬平の行
長と相熟懇なり事に臨んで彌縫し苟且に事を成さんとす而して實情を以
て之れを天朝と我國とに聞かしめざるが故に事諧はず本國卽ち使を遣し
馳せて其の事を奏す是に於て石星沈惟敬皆罪を得て天兵再び出づ

水軍の統制使李舜臣を逮へて獄に下す初め元均舜臣が來援するを德と
し相得て甚だ懽ぶ既にして功を爭ひ漸くにして相能からず均性險詖且つ
多く中外に連結して舜臣を事に構へて誣ひ餘力を遺さず每に舜臣始め來
ることを欲せず我が固請するに因て乃ち至る敵に勝つは我れを首功とな
すと言ふ、時に朝議分岐す各々主薦する所あり舜臣初め余が爲に悅ばず余
は元均と舜臣を合せ攻むること甚だ力むたゝ右相李元翼其の然らざるこ
とを明かにして曰く舜臣は元均と各分守するの地を有ち初めは卽ち進ま



ざるは未だ深く非とするに足らずと、是より先き賊將平の行長倭卒の要時
羅をして慶尙の右兵使金應瑞が慇懃を致さしむ方に清正の再び出でんと
欲するや時羅密に應瑞に言つて曰く我將行長今此和議成らざるは清正あ
るが故なり吾れ甚だ之れを疾む某日清正當に海を渡らんとす朝鮮水戰を
善くす若し之れを海中に要擊せば以て敗殺すべし愼んで機を失ふ勿れと
應瑞その事を上奏す朝議之れを信ず海平君尹根壽尤も踴躍して思へらく
機會失し難しとし屢々之れを啓し連りに舜臣に進まんことを促す舜臣賊
の詐りあらんことを疑ひ遲々として延引すること累日是に至つて要時羅
又來て曰く清正今已に陸に下る朝鮮何ぞ要截せざるやと伴つて恨惜の意
を表はす事朝廷に聞するや議として皆舜臣を咎む臺諫の如きは舜臣を拿
鞫せんと請ふ慶尙道の玄風の人前の縣監朴惺と云ふ者亦時の論を承望す
上疏して言を極めて舜臣を斬るべしとす遂に義禁府都事をして拿へ來ら
しめ、元均代つて統制使たり上猶疑ひて上聞する所實を盡さずとし特に成
均の司成南以信を遣して閑山に下り廉察せしむ以信既に全羅道に入る軍

民道を遮て舜臣が寃を訟る者數ふるに勝ふべからず以信實を以て上聞せずして乃ち曰く清正海島に留ること七日我軍若し往かば縛し來るべしと而して舜臣逗遛して機を失す舜臣獄に下る大臣に命して罪を議す獨り判中樞府事鄭琢言ふ舜臣は名將なり殺すべからず軍機の利害は遙かに度るべからずその進まざるは未だ必ずしも意なきにあらず請ふ寛恕して以て後效を責め拷問一次にして死を減じ職を削り軍に充てよと舜臣が老母牙山にありて舜臣が獄に下ると聞き憂悸して死す舜臣獄を出て道に牙山を過ぐ喪服して卽ち往く權慓か帳下に軍に從ふ者聞いて之れを悲む

天朝兵部尙書邪玠を以て統督軍門となし遼東の布政司楊鎬を經理朝鮮軍務となし大將となす楊元劉綎董一元等相繼て以づ丁酉五月楊元三千の兵を領して先づ來り京城に留ること數日、全羅道を下り南原に駐つて守る蓋し南原は湖嶺の衝に據り城頗る堅し往時駱尙志又增築したるもの守るべきが故なり城外に蛟龍山の城あり衆山城を守らんと欲す楊元思へらく本城守るべしと、埠を增し濠を浚ひ壕內又羊馬の墻を設け晝夜役を董し月



餘にして粗々定成す

# 懲毖錄卷の四

八月初七日閑山の舟師潰ゆ統制使元均全羅の右水使李億祺死す慶尙の右水使裴楔走免せらる初め元均既に閑山に到つて盡く舜臣か約束を變じ凡て褊裨士卒にして舜臣に信任せられ頗使せられたりし者は皆斥き去る李英男に詳細に己れか前日敗れて奔りたるの狀を知るを以て最も之れを惡む、軍心怨み憤る、舜臣閑山に在るのとき堂を作り名けて運籌と云ひ日夜其の中に處り諸將と共に兵事を論じ下卒と雖とも軍事を言はんと欲する者は來り告ることを許して以て軍情を通す每に戰はんとすれば悉く褊將裨將を招いて計を問ひ謀定て後に戰ふ故に敗るゝことなし、均は愛妾を挈げて其の堂に置き重籬を以て內外を隔て諸將其の面を見ること罕れなり又酒を嗜とて日々酗怒を事とし刑罰度なし軍中窃かに語つて曰く若し賊に遇はゞたゞ走るのみと諸將私かに相譏り笑ひ亦稟思せず故に號令行はれず時に賊將に再び入寇せんとす平行長又要時羅をして金應瑞を欺かし



めて倭船某日當に添へ至るべし朝鮮の舟師猶ほ邀擊つに可ならんと言ふ都元師權慄最も其の說を信す且李舜臣が逗留せられて已に罪を得るを以て日々元均を促して兵を進めしむ均已れ先に常に舜臣が賊を見て進まざるを言ふが故に舜臣を陷れ己に其の任に代り得たるを以て是に至つて其の勢難きことを知ると雖とも、慙ぢて其の辭と爲すことなく只盡く舟繼を率きて前むことを得たり倭營の岸上に在る者俯して舟の行くを見て互に相傳報す均絕影島に至る風作り浪起ちて日已に昏れ船の泊る處なし倭船の海中に出沒するを望み見て均諸軍を督して進み戰ふ舟中の人閑山より終日櫓を搖して休息することなく又飢渴に困し疲れて船を運ぶこと能はず諸船の縱橫進退乍ち前み乍ち退く、倭之れを敗らんと欲し我船と相近き輙ち相伴つて去り與に鋒を交へず夜深く風盛にして我船四方に散して分れ漂ひ互に向ふ處を知らず均餘船を收め難く還つて加德島に至る軍士渴ゆること甚し爭つて船を下てつ水を取る倭兵島中に突き出てゝ之れを掩擊す將士四百餘人を失ふ均又引き退いて巨濟黍川島に至る權慄固城に在

つて均の得る所無きを見て檄して均を召し之れを杖ち督して更に進ましむ均還つて軍中に至り益々恐懲酒を飲み醉臥す、諸將均に會見して事を言はんと欲すれども得ず夜半に倭船之れを來襲す軍大に潰れ均走つて海邊に至り舟を棄てゝ岸に登り走らんと欲すれば體肥れて鈍なり松樹の下に座す左右の者皆散す或は賊の爲に害せらると言ひ或は走れて免しと言ひ遂に其の事實を得ず李憶祺船上より水に投じ斐楔是より先き屢々均が必ず敗れんことを諫む是の日又黍川島の淺く窄くして船を行るに利ならざることを言ひ宜しく陣を他處に移すべしと勸む均皆聽かず楔私かに一所に約して船を領し戒嚴して變を待ち、賊の來り犯して港を奪ふを見て先づ走りしが故に其の軍獨り全し楔還つて閑山島に至り火を縱つて廬舍糧穀軍器を焚き餘民の留つて島中に在る者を促し賊を避け去らしむ閑山既に敗れて賊勝に乘して西に向ふ南海順天次第に陷沒す賊船豆恥津に至り陸に下つて進んで南原を圍む兩湖大に震ふ蓋し賊壬辰より我が境に入りたゝ舟師に敗らる平の秀吉之を憤り行長を責むるに舟師を取ることを以て



し以後必ずしも之れに依るべからずと命ず、行長伴つて金應瑞に輸款し親昵し李舜臣をして罪を得せしめ、又元均を誘つて海中に出さしむる等盡く軍の虛實を得て因て掩襲を行ふ其の計至つて巧にして我れ悉く其計中に墜つ哀いかな倭兵黃石山城を陷いる安陰縣の監郭越前咸陽郡趙宗道死す初め體察使李元翼元帥權慄道內の山城を修理して賊を禦かんことを議し公山金烏龍紀富山等の城を築きたるに公山金烏民力を用ふること最も多し悉く其郡の器械糧餉を收めて其の中に充實せしめ守令を督して盡く老弱男婦を率きて入つて守る遠近騷走たり賊再び出動するや淸正西生浦より西全羅に向ひ將に行長が水路の兵と會して南京を攻めんとす元師以下皆風を望んで引き去る令を各處の山城に入つて守る者に傳へて各々散し去つて兵を避けしむたゝ義兵將郭再佑昌寧の釜の山城に入つて死守を期す賊山下に到り仰き見て形勢斗絕し城內の人靜帖して動かざるを以て攻めずして去る安張の盛郭越黃石の山城に入る前の金海府使白士霍又城中に入る士霖は武人なり衆議はて以て重しとなす賊將城を攻むること一日

士霖先つ遁れ諸軍皆潰ゆ賊城に入る越宇履履祥厚等と皆死す越が女柳文虎に嫁す文虎倭に擒らる郭民城を出て丶之を聞き其の婢に謂つて曰く父死して死せざるは夫在るが爲のみ今夫又執らる吾何ぞ生を貪らんと自刎して死す趙宗道嘗て曰く吾嘗て大夫の後裔たり奔竄の徒と死を草間に同うすべからず死なば當に明白に死すべきのみと妻子を率き城中に入り詩を作つて曰く崆峒山外生猶喜巡遠城中死亦榮遂に越と同じく害せらる

復李舜臣を起して三道の水軍の統制使と爲す閑山の敗報至り朝野震駭す上邊に備ふる諸臣を引見して之れに問ふ辭臣惶惑して對ふる所を知らず庭林君金命元兵曹判書李恒福從容として啓して曰く此れ元均の罪なり たゞ當に李舜臣を起して統制使たらしむべきのみと上之れに從ふ時に權慄元均が敗を聞いて李舜臣をして往て殘兵を收めしむ賊將さに衝斥す舜臣軍官一人と慶尙道より全羅道に入り晝夜潛かに行く微行して珍島に達し兵を收めて賊を禦かんとす倭兵南原府を陷る天將楊元走り還る全羅の兵使李福南南原府使任鉉助防將金敬老光陽縣の監李春元唐將接伴使鄭期



遠等皆死す軍器寺の破陣軍十二人あり陽元に隨つて南原に入りしが皆兵の爲に死す獨り金孝義と云ふ者あり脫することを得たり余に城を陷ることを語つて頗る詳細なり楊總兵既に南原に至る城を增築し一丈計り城外の羊馬墻多く砲穴を穿ち城門に大砲數三座を安置し深く塹濠を鑿ること一二丈閑山既に敗し賊水陸より至る報して甚だ急なりとす城中悶々として人民逃れ散る獨り總兵が領する所遼東の馬軍三千城內に在り總兵檄して全羅の兵使李福男を召し同じく守らしむ福男遷延して至らず連り二夜不收(之れ守邊軍の別名なり)を發して之れを促す福男已むことを得ずして至る率する所僅に數百光陽縣の監李春元助防將金敬老等庇に至る

八月十三日倭の先辭百餘城下に到る鳥銃を放ち須らくにして止む皆田畝の間に散り伏して三々五々隊を成す既にして去り復た來る城上の人勝字小砲を以て之れに應ず倭の大陣遠方に在つて遊兵を出し交戰し列を疎にして交代に出づ故に砲を發すれども中らず守城の卒往々賊の丸に中つて斃る既にして倭城下に到り城上の人を呼び與に居らんことを求む總兵

家僕一人をして往かしむ、少らくにして家僕は倭書を以て歸り來る乃ち戰を約するの書なり十四日倭城の三面を環り陣を結び銃砲を以て交々攻むること前日の如し是より先き城の南門の外は民家稠密なり賊至るに臨んで總兵之れを焚かしむ而も石墻土壁猶存す賊來て墻壁の間に依て自ら蔽ひ丸を放つ多く城上の人に中る十五日倭兵の城外の雜草及び水田の中の稻禾を刈り大束となすこと無數之れを墻壁の間に積むを見る城中何の故なるかを知らず時に遊擊將軍陣愚夏三千の兵を領して全州に在り南原の軍日々來り援はんことを望むこと久しくして至らず軍心益々懼る是の日晩れて堞を守る軍勢往々頭を交へて耳語して豫め馬鞍を備ふ遁れんとするの色あるなり夜は一更倭の陣中囂聲大に起るを聞く畧々相和して物を運ぶの狀に異ならず而して一面の衆砲城に向つて亂發するが丸は飛んで城上に集ること雹を降らすが如し城上の人頭を縮め敢て外を窺はず一二時を經て囂聲止む打ち見れば草束已に深に平なり又羊馬墻の內外に堆積して僅かに城と平行ならんとする程なり衆倭之れを蹂み躪して城に登る



已に城中大に亂るゝを聞いを云く倭城に入ると孝義初め城の南門の外にある羊馬墻を守りたりしが慌忙として城に入る、城上已に人なくたゞ城內を處々に火の起るを見る走つて北門に至れば唐軍悉く馬に乘つて門を出てんと欲す門堅く閉ぢて易く開くべからず馬足は束するが如く街路は塡塞せられたり既にして門開き軍馬門を爭つて出づ倭兵城外にあり圍すること數三重各々要路を守り長刀を奪つて之れを亂し斫る唐軍絕首して及を受く適に月明かにして脫るゝ者幾んどなし總兵家僕數人と馬を馳せて突き出で僅かに身を以て免る或は曰く倭は總兵の爲す所を知るが故に逃せしむと、孝義同伴する所の一人と門を出づ此の一人賊に遇て死す孝義水田に跳り入つて草中に伏し倭の兵を收むるを待て逃すると云ふ蓋し揚は乃ち遼將從に虜を禦くことを知つて倭を禦くことを知らず以つて敗に至る之れ亦平地の城の之れを守ること甚だ難きことを知るなり詳かに孝義が言を記し後に守禦する者をして戒とする所を知らしむるなり、南原既に陷つて全州以北瓦解して爲す所を知らず、後に楊元竟に此の故を以て罪に

伏するや其の首を傳へて徇なへ示すなり、

統制使李舜臣倭兵を珍島の碧波亭の下に破り其將の馬を殺すこと多し時に舜臣珍島に至り兵船を收拾して十餘隻を得たり時に沿海の人にして船に乘つて亂を避くるもの無數、舜臣が來ることを聞いて喜悅せざるはなし舜臣道を分つて之れ等の人を招き呼ぶに遠近より雲の如く集る軍後にあつて形勢を助けしむ賊將馬多くして水戰を善くすと號す其の船二百餘艘を率きて西海を犯さんとして碧波亭の下に相遇ふ舜臣十二船を以て大炮を載せ潮に乘じて至り流に順つて之れを攻む賊敗して走る軍聲大に振ふ是の時舜臣既に軍八千餘人を有し進んで古今島に駐る糧の乏しきことを患へて海路通行の帖を作つて令して曰く三道沿海の公私の船にして帖なきものは奸細を以て論じ通行することなかれと、是に於て亂を避け船に乘る者は來りて帖を受く舜臣、船の大小に隨つて順次米を納めて帖を受けしむ大船は三石中船は二石、小船は一石なり、亂を避くるの人盡く財穀を載せて海に入る故に米を納むるを以て難となさずして通行禁なきを以て喜



悅す、旬日にして軍糧萬餘石を得たり、又民を募つて銅鐵を輸して大砲を鑄り木を伐り船を造る、事々に皆辨ず、遠近の兵を避くる者往て舜臣に依り盧を結ひ募を造り商業に從事して生計を爲す者多く島中容るゝこと能はざるに至る既にして天朝の水兵都督陳璘出で來つて南の方古今島に下る舜臣と兵を合す璘が性暴猛人と忤ふこと多し人多く之れを畏る上別を餞して青坡の野に送るや余璘が軍人を見るに守令を歐辱して忌ふなし繩を以て察訪李尙規が頸に繫けて之れを曳く血を流すこと面に滿つ譯官をして解かんことを勸めしも得ず、余同坐の宰臣に謂つて曰く惜むべし李舜臣が軍又將に敗れん璘と同く軍中にあらば相掣肘して擅着し事を矛盾せしめて必ず將權を爭奪せん果して軍士を縱暴にし之れに逆へば則ち怒を增し之れに順へば厭はるゝなし軍何に由つてか敗れざらんと衆曰く然りとなし、相與に嗟嘆するのみ舜臣璘が將に至らんとするを聞き軍人をして大に細漁せしめ鹿豕海物を得ること甚だ多く盛に酒醪を備へて之れを待つ璘が船海に入る舜臣軍儀を備て遠く近へ既に到れば大に其の軍を享す諸將

以下沾醉せざるなし士卒相告て語つて曰く果して良將なりと璘も亦心に喜ぶ久しからずして賊船近島を侵し舜臣兵をして之れを敗らしむ賊首四十級を獲り悉く璘に與へて功と爲す璘蓋し喜び望に過ぎたり是より凡そ事一に舜臣に咨ふ出つるときは則ち舜臣と輪を並べ敢て先んじて行かず舜臣遂に唐軍に約束して已れの軍と間なし民の一縷を奪ふ者あれば皆拿へ來つて捆打す、敢て令に違ふものなく島中肅然たり璘上書して曰く統制使は天に經し地に緯するの才天を補ひ日を浴するの功ありと、蓋し心服する故なり、賊兵退く、時に賊三道を蹂躪して過ぐる所皆廛舍を焚き人民を殺戮し凡て我國人を得れば悉く其の鼻を割いて以て威を示す、兵稷山に至る都城の人皆奔り散る

九月初九日內殿兵を避けて西に下る經理楊鎬提督麻貴京城に在り、平安道の軍五千餘人黃海京圻の軍數千徵募せられて至る、分て江灘を守り倉庫を警守す賊京畿の界より還り退く、清正再び蔚山に屯し行長順天に屯す沈安頤吾泗川に屯し首尾七八百里なり是の時都城幾んど守らず朝臣爭て出



で亂を避くるの策を獻す知事申砧進言して曰く車駕應さに寧邊に幸すべし曾て兵使となり備さに地利を諳んす其の最も憂とする者は乃ち醬也若し豫め辨出置かずんば何を以てか用を繼がんと、聞く者傳へて笑ふ、一大臣朝堂に言つて曰く此の賊何ぞ憂ふるに足らん久しくして當に自ら息むべしたゝ乘輿を奉じて安便の處に往かんのみと元帥權慄走つて京に來る上引見して之れに問ふ慄曰く事定るも遽に車駕都城に還るべからず當に西方に留つて賊勢を覘察するを可とすと既にして賊退き慄復た慶尙道を下る臺諫、慄が無謀にして恇怯元帥たるべき人にあらざるを論す上許さず十二月楊經理麻提督騎步兵數萬を領して慶尙道を下り進んで蔚山の賊營を攻む時に賊將淸正城を蔚山郡の東海邊斗絕の地に築く、經理提督其の不意に乘じて之を掩擊し鐵騎を以て馳せ擊つ賊披靡して支ること能はず天兵賊の外柵を奪ふ賊內城に奔り入る天兵擄獲の利を貪つて即刻進んで攻めず賊門を閉ぢ固く之れを守る勝たず諸營分れて城下に屯す圍み守ること十三日にして賊出でず二十九日余慶州より往きて經理提督に見ゑ賊壘を

望むに甚だ靜閑として寂として人聲無し城上女墻を設けず四面を環つて長廊を作り守兵悉く其の內にあり外兵若し城下に至れば則ち銃丸を亂發する、こと雨の如く每日鋒を交ふ天兵と我軍と城下に死すること積を成す賊船西生浦より來り援く水中に列り泊つて鳧鴈の島の山に水無く賊每夜出で城外に汲む經理金應瑞をして勇士を率き城外の泉の傍に伏せ連夜百餘人を擒にす皆飢羸して僅かに聲氣を發するのみ諸將言く城內糧絕ゆ久しく圍まば將に自ら潰ゐんと時に天甚だ寒く陰雨降り士卒の手足凍凝す己にして賊又陸路より來つて援く經理賊の爲に乘せられんことを恐れて遽かに師を旋へす正月天將悉く京師に回り再舉を謀る

戊戌七月經理楊鎬罷らる新經萬世德之れに代る時に邢軍門の參謀官兵部の主事丁應泰奏して楊鎬を效し欺罔をして事を誤る二十餘を列擧す、鎬遂に去る、上鎬を諸經理の中にありて銳意賊を討ちたるを以て左議政李元翼を遣はして伸救の赦免狀を賫にして馳せて京師に赴かしむ、八月鎬西に去る



上弘濟院の東に至り涕を流して別れ萬世德將に出でんとして未だ來らず、九月邢玠又麻貴を蔚山に主たらしめ董一元を泗川に主たらしめ劉一を順天に主たらしめ陳璘を水路に主たらしめ日時に攻め進ましむ皆利あらず董か軍賊の爲に敗られ死するもの最も多し十月劉提督再び順天の賊營を攻む統制使李舜臣舟師を以て火に其の援兵を海中に破る舜臣之れに死す賊將平の行長城を捨てゝ遁る釜山蔚山河東沿海賊屯悉く退く時に行長城を順天の芮橋に築きて堅く守る劉綎大兵を以て進んで攻むれとも利あらず順天に還る既にして復た進んで之を攻む李舜臣唐將の陳璘と海口を扼して以て之れに逼り行長援を泗川の賊沈安頤吾に求む頤吾水路より來て援く舜臣進擊して之を破り賊船二百餘艘を焚き殺獲すること算なし追つて南海の界に至る、舜臣自ら矢石を犯して力め戰ふ、飛丸あつて其の胸に中り背を貫く左右の者扶けて帳中に入る、舜臣曰く戰方さに急なり値して我か死を言ふことなかれと言ひ訖つて絕息す、舜臣の兄子芫素より膽量あり其の死を秘して舜臣が令を受けて自ら戰を督すること益々急なり軍中

舜臣の死を知るものなし陳璘が重る所舟賊の爲に圍まる芫望み見て其の兵を揮つて之れを救ふ賊散し去る璘人をして舜臣に使となして已に救はんことを求め始めて其の死を聞き椅上より自ら地に身を投げて曰く吾意ふに老爺生き來て我を救ふことを望みしに今何が故に亡きかと膺を擁て大に慟く一軍皆哭す聲海中に震ふ行長舟師に乘して賊の其の營を過ぐるもの追ひて其の後より逃れ去る是より先き倭會平秀吉已に死す故に沿海の賊屯悉く退く我軍唐軍と舜臣の死を聞いて連營慟哭すること私親を悼むが如し柩の至る所人民處々に祭を設け車を挽て哭して曰く公實に我れを生む今公我れを棄てゝ何くにか之くと道路壅塞して車の進むを得さる程なり行路の人涕を揮はざるはなし議政府右議政を贈る邢軍門謂へらく當さに祠を海上に立て以て忠魂を奬むべしと事竟に行はれず是に於て海邊の人相率きて祠を爲し號して愍忠と曰ふ時中を期して祭を致す商賈漁船往來して其の下を過ぐれば人々之れを祭ると云ふ

李舜臣字は汝諧德水の人其の先は邊と曰ふ官は判府事に至る直名あり



曾祖を琚と曰ふ成宗の燕山に事へて東宮にあり琚講宮となつて人に見ゆる頗る嚴を以て憚らる嘗て掌令となる彈劾せらるゝも避けず百僚之れを憚る虎掌令の稱あり祖伯福門蔭を以て仕へ父貞は任へず舜臣少時英爽不羈群兒と戲るときは木を削て弓矢となし里閭の中に遊んで意の如くならさる者に遇へば其の目を射んとす長老も或は之れを憚れり敢て其の門を過ぎず長ずるに及び射を美くす武擧に從つて身を發す李氏世々儒を業とす舜臣に至り始めて武科を得たり權知訓鍊院の奉事に補せらる兵曹判書金貴榮孽女あり舜臣に與へて妾となさんとす舜臣肯せず人之れを問へば舜臣曰く吾初めて仕路に出づ豈敢て跡を權門に托して進むことを媒せんやと兵曹正郎徐益親しむ所あり訓鍊院に在り官位を覬みす僭越にも之れを推薦せんとす舜臣院中の掌務官なるを以て固執してその言に從はず益舜臣を引いて庭下に詣り之れを詰る舜臣辭色變せず直辨撓むことなし益大に怒り氣を盛にして之れに臨む舜臣從容として應答終に少しも沮まず益本と多氣にして人に傲る同僚と雖とも亦之れを憚り之れと爭辨するを

難んず是の日下吏階下に在つて皆相顧みて舌を吐いて曰く此の宮敢て本曹と抗す獨り前路を顧みざる者かと日暮れて益遂に愧ちて身を屈し舜臣を去らしむ識者は此を以て往々舜臣を知る方に獄に下るの時事測るべからず獄吏あり密に舜臣が兄子芬に語つて賄するあれば則ち免るべしと言ふ舜臣之を聞いて芬に怒つて曰く死なば則ち死なんのみ安んぞ道に違ひて生を求むべけんやと其の操執大概ね此の如し舜臣爲人寡言笑へば容貌雅飭にして修謹の士の如し而も中に膽氣あり身を忘れて國に絢ふも乃ち其の素より蓄積する所のものなり兄義臣堯臣皆先んじて死す舜臣其の遺孤を撫すること已か子の如くす凡そ嫁娶は必す兄の子を先にして而る後に已か子に及ぼす才あつて命なく百に一も施さずして死す嗚呼惜ひ哉

統制軍に在るや晝夜威嚴未だ嘗て甲を舷かず見乃梁に在るや賊と相持す諸船已に碇を下ろし夜月色明なること甚し統制甲を帶び鼓を枕にして臥し忽ち起きて座し左右に呼び燒酒を取り來らしめて一杯を取り悉く諸將を呼んで前に至らしめ之れに語つて曰く今夜月甚だ明かなり賊詐謀多



し月無き時こそ固に當に我れを襲ふべし月明かなれとも亦應さに來り襲ふべし警備嚴にせずんばあるべからずと遂に令角を吹き諸船をして皆碇を舉げしめ又斥候に傳令す船の斥候方に熟睡するを喚び起して變を待つ之れを久して斥候賊の來るを告ぐ時月西山に批り山影海に倒にして半邊に微かに陰れ賊船數無く陰黑の中より來り將さに我船に近く是に於て中軍大砲を放つて吶喊す諸船皆之れに應ず賊備あるを知つて一時に鳥銃を放ち其聲海中に震ひ飛丸の水中に落つるもの雨の如く遂に敢て犯さずして走る諸將以て神となす

# 組後雜記

戊寅の秋長星天を貫き狀白練の如し西より東に向ふ數月にして滅す戊子の間漢江三日赤し、辛卯の年太平院の後に石わつて自ら起立して通津縣に偃れ復た起つ民間訛言して將に都を遷すべしと又東海の魚西海に產して漸く漢江に至る海州素より青魚を產す近者十餘年絕ねて產せず移て、遼海に產す遼東の人之れを新魚と謂ふ又遼東の八站の居民一日故なくして相驚いて曰く寇あり朝鮮より至る朝鮮の王子十亭橋子鴨綠江に到ると傳へて相告語して老弱山に登り數日にして平定す又我國の使臣北京より還つて金石山の河姓の人の家に宿りたるに其の主人の言く朝鮮の譯官あり我れに語つて曰く爾三年の酒五年の酒あるも惜む勿れ樂を爲すこと久しからずして兵至らん爾等酒ありと雖ども誰れか之れを飲まんと此を以て遼人朝鮮に異志あるを疑ひ多く驚惑すと云ふ使臣歸つて其の事を啓す朝廷譯官に必ず言を造り事を生じ本國を誣陷するものありとして以て數人



を逮捕して仁政殿の庭に鞫するに壓膝火形を用ひたるも皆服せずして死す此れ辛卯年間の事明年遂に倭の變あり是れによりてか知れぬ大亂將さに生ぜんとして人未だ覺らずと雖ども而も兆朕(ケザシ)に形(アラハ)れて其の端を一にせず白虹日を貫き太白天に經するに至つては歳として之れなきはなし人視て常事となす、又都城常に黑氣あり煙にあらず霧にあらず地に盤り天に接り此の如くなること幾十餘年なり其の他の變怪以て彈記し難し、天の人に告るもの深切なりと謂つべし而も特に人の察する能はざるのみ、杜詩に長安城頭頭白き鳥あり夜延秋門の上に飛んで呼ぶ又人家に向つて大屋を啄む屋底の達官走つて胡を避くと蓋し異を記するなく壬辰四月十七日賊報至る、朝野遑々たり忽ち怪鳥あり後苑に鳴き飛んで空中にあり或は近く或は遠く只一鳥にして聲は城中に滿ち人として聞かざるはなく終日終夜其の鳴くこと暫くも停らず此の如きこと十餘日車駕出でゝ狩し賊城に入る宮闕廟社公私廬舍一に空し、嗚呼それ怪も亦甚しいかな、又五月余駕に隨つて平壤に至る金乃進が家に宿す乃進余に語つて曰く年前財あり屢々城中

に入る大同江の水赤して東邊濁ること甚しく西邊は清し今果して此の變ありと、時に賊猶未だ平壤に至らず余此の語を聞いて默然として答へずして心喜びず、未だ幾くならずして平壤亦陷る蓋し豺は野獸にして城市に入るものにあらず春秋に鵲鵅來つて巢ひ六鷁退き飛び鹿多く蜮あるの類を記するが如きは其の應無きものあること鮮し、天の人に示すこと顯かなり聖人の戒を垂るゝこと深し懼れざるべけんや愼まざるべけんや又壬辰春夏の間歲星尾箕を守る尾箕は乃ち燕の分にして古より我國と燕と分を同じくするを言ふ時に賊兵日に逼り人心恟懼し出る所を知らず一日敵をトして曰く福星方に我國にあり賊畏るゝに足らずと蓋し聖意之れに假て以て人心を鎭めんと欲するが故なり然れども此後都城失すと雖ども卒て能く舊物を恢復し軫を舊京に旋す、賊首秀吉又終に凶逆を逞うすること能はずして自ら斃る是れ豈に偶然ならんや蓋し天に非ざるはなし、

倭は最も奸巧なり其の兵を用ふること一事として詐術に出でずと云ふことなし、然れども壬辰の事を以て之れを觀るに都城に工にして平壤に拙



しと謂つべし、我國昇平百年民兵を知らず猝かに兵の至るを聞いて蒼黃頓倒し遠近靡然として皆魂魄を失ふ倭破竹の勢に乘じて旬日の間經ちに都城に造り智をして謀るに及ばず勇をして斷ずるに及ばざらしめ人心崩潰し收容すべきなし此れ兵家の善謀にして賊の巧計なり故に曰く工計なりと是に於て乃ち自ら常に勝ち威を恃んで其後を顧みず諸道に散出して其の狂肆に任ず兵分るゝときは則ち勢弱からざるを得ず千里營を連ね日を曠うして持すること久し所謂强弩の末魯縞をも穿つ能はざるものにして張叔夜の所謂る女眞は兵を知らず豈孤軍深く入つて能く其の歸を善くするものあらんやと殆んど之れに近し是を以てか天兵四萬を以て平壤を攻め破り平壤既に破るゝときは則ち其の諸道にある者も亦皆氣を喪ひ京城猶據るとも雖ども大勢既に縮る我民の四方にあるもの處々に要擊し賊の首尾相救ふ能はず終に遁れざるを得ず故に曰く平壤に拙しと嗚呼賊の計を失ふは我が幸なり誠に我國をして一將を有ちて數萬の兵を將き時に相ひ奇を用ひ擊ちて長蛇を斷ち其の要脊を分て之れを平壤の敗に行かしめば

則ち其の大帥坐らにして致す可し之れを京城以南に發するときは則ち將に隻輪をして返らざらしめんとす此の如にして然る後賊の心驚に膽破し數十百年の間敢て我れを正視せずして復た後慮なからん當時我方さに積衰にしてか此れを辨ずる能はず天朝の諸將又此に出づるを知らず賊をして從容として去來し略んど懲畏するなく要索萬端ならしむ是に於て下策に出で封貢を以て之れを羈縻せんと欲す嘆ずるに勝ふべけんや惜むに勝ふべけんや今に至て之れを思へば人をして腕を扼せしむるなり昔し　錯兵事を一言して曰く兵を用ゐ戰に臨み刄を合すの意に三あり一に地形を得二に卒服習し三に器用利なりと此の三者は兵の大要にして勝負の決する所なり將たるもの〻知らざるべからざるものなり倭奴攻戰に習て而も器械積利古に鳥銃なくして今は之れあり其の遠きに致すの力命中するの巧弓矢に倍蓰す我れ若し平原廣野に相遇ひ兩陣相對し法を以て交戰するときは則ち之れに敵すること極めて難し蓋し弓矢の技百步に過ぎず鳥銃は能く數百步に及ぶ來ること風雹の如くにしてその之れに當る能はざる



こと必せり然れども先づ地形を選み其の山阨險阻林木茂密の處を得て散じて射手を伏せ賊をして其の形を見せしめずして左右俱に發するときは則ち彼れ鳥銃槍刀と雖ども皆施す所なく大に勝可きなり今一事を擧げて證となすに壬辰賊城に入り日を逐つて城外を分掠し園陵も亦保たざるに至る高陽の人進士李檜あり稍弓を操ることを解し膽氣あり一日同伴二人と各々弓矢を持し昌敬陵に入る不意に賊衆大に出で谷中に滿ち檜等以て計をなすことなく奔つて藤羅の蒙密せる叢の中に入る賊來て之れを索め徘徊窺覘す檜等その內より轍ち之れを射る賊皆弦に應じて倒る又其の處を移し往來倏忽として賊の最も能く測るなきものとなる是より至る所叢の薄きを見るときは則ち遠く〳〵走り避け敢て近かず故に二陵全きことを得たり之れを以て之を見るに地形の得失は成敗之に隨ふ賊尙內に在るに方つて申砬李鎰等若し此れを出るを知り先づ兎遷鳥嶺三數十里の間に於て射手數十人を伏せ賊をしてその多少を測ることなからしめば則ち以て敵を制すべし乃ち烏合の卒不錬の兵を以て其の險塞を棄て平地に相角

す宜なりその敗るゝことや、余兵機に備に之れを言ふ今又特に之れを記して以て後の戒となす、

城は暴を禦ぎ民を保つの所なり當に堅固を以て主となすべし古人の城の利を言ふ者皆雉を曰ふ所謂千雉百雉とは是なり、余平時書を讀むこと鹵莽にして雉の何故たるかを知らず毎に梁を以て之れに當つて疑ふらく梁はただ千百なるときは則ち其の城至つて小にして衆を容るゝこと能はず將た何を以てせんやと變後に及んで始めて戚繼光紀效新書を得て之れを讀む乃ち雉は梁に非ざるを知る卽ち今の所謂曲城甕城なる者なり蓋城にして曲城甕城なきときは卽ち人一梁を守りて梁間に楯を立て以て外面の矢石を遮ると雖ども賊の來つて城下に傅ふるものは見て之れを禦ぐべからず紀效新書に五十梁毎に一雉を置き外に出づること二三丈二雉の間相去ること五十雉一梁各に地を占むること二十五梁にして矢力方さに盛なり右左に顧眄し射を發するに便にして敵の城下に來附するに緣るべきなし壬辰の秋余久しく安州に留る念ふに賊方に平壤にあり若し一朝西に下



らば則ち行在の前面に一も遮障する處なけんと其の力を量らず安州の城を修理して之れを守らんと欲す重陽の日偶々晴川の江上に出でゝ州城を顧視て點坐深念するもの之を久しうして忽ち一策を思ひ得たり城外當に形勢に從て別凸城を築き雉制の如くしてその中を空しくし人を容れしめ前面及び左右に砲穴を鑿出し中より砲を放たしむべし上に敵樓を建て樓距ること千步以上大砲の中に鐵丸の烏卵の如き者數斗を藏し賊多く城外相に集れば砲丸兩處より交々發し人馬を論ずることなく金石と雖とも摩碎せざるなし是くの如きときは則ち他堞なる守兵しと雖とも只數十人をして砲樓を守らしめて而も敵敢にて近くことなからん此れ實に城を守るの妙法にして其の制は雉に倣ふものなれども功は雉に勝ること萬々なり蓋し千步の內敵既に敢て近かずんば則ち所謂雲梯衝車なるものも皆用ゆることを得ずと此の事余偶々之れを思ひ得たりその時卽ち行在に啓聞す後經席に於て屢々之れを發し又人をしてその必ず用ゆべきを見せしむ、西中の春京城東水江門外に地を擇み石を聚めて之れを作す未だ成らずして異

論紛起して廢つて修せす後日若し遠く慮る者あらば徒に人の言に依つて之れを廢するなく此の制を修舉せばつめる則ち防禦の道に於て益する所小ならざらん、

余安州にあり時に友人金士純慶尙の右監司たり書を送して曰く晉州を修治して死守の計をなさんと欲すと是より先き賊嘗て一たび晉州を犯し勝たずして退く余士純に答へて云ふ賊早晩必ず來らん來り報せば卽ち必ず大勢を用つて守る舊に比すれば羌難けれどもたゞ當に砲樓を建て以て之れを待つべく患なかるべしと遂に書中に詳にその制を傳ふ癸巳六月余賊の復た晉州を攻むると聞き辛從事慶晉に云つて晉の事甚だ危し幸にして砲樓あらば則ち猶支へつべし然らずんば守り難からんと既にして陜川を下り晉已に陷ると聞く丹城縣の監趙君宗道も亦士純か友なり余が爲に前年士純と同じく晉州に在り士純余が書を以て踴躍奇と稱し卽ち慕ふの士官數人と城を巡り其の地形に由つて思へらく當に八處に督して木を伐らしめ江に浮べしむべしと州民其の役を憚る乃ち曰く前に砲樓なければ



も猶守つて賊を却く今何を以てか人を勞せんと士純聽さず材已に見る役を始ること日有り適々士純病んで起たず其の事遂に寢むと云ふ相與に一たび働きて罷む呼嗚士純の不幸は卽ち一城千萬人の不幸なり斯れ固に數なり人力の能く客るゝ所に非らず

壬辰四月賊連りに內郡を陷ふる我軍風を望んで潰散し敢て鋒を交る者なし備邊司の諸臣日に闕下に聚り備禦の策を講して而も計を爲すことなし或る人建議して曰く賊善く槍刀を用ふ我れに堅甲の禦ぐべきものなし故に敵する能はず當に厚鐵を以て滿身の甲となし被て賊陣に入るときは則ち賊刺すべき隙間なく而らば我勝つべしと衆の曰く然りと是に於て工匠を聚め晝夜打ち造る余獨り思へらく不可なりとして曰く賊と鬪ふは雲合鳥散して捷の疾きを貴ぶ既に滿身に厚甲を被らば其の重きこと勝すべからずして身も且運ぶべからず何ぞ賊を殺すを望まんやと數日にして其の用なきを知り遂に工を罷む又臺諫大臣に是工を計て言はんと請ふ其の中一人氣を盛にして大臣の謀なきを斥く座上問ひて何の策あるかと曰へ

ば對へて曰く何ぞ漢江の邊に多く高柵を設け賊をして上ることを得ざらしめ俯して之れを射ざるやと或る人曰く賊の鐵丸亦上ることを得ざるやとその人語なくして退く聞く者傳へて笑ふ嗚呼兵は常の勢なく戰は常の法なし機に臨んで變を制し進退合散奇を出すこと窮りなし要するに只將にあるのみ然らば則ち千言萬計皆用ゆることなからんたゞ一將才を得るに在り、錯の陳ぶる所のみ策最も切要に係り一を闕くも不可なり其の餘の紛々たる者何の補かあらん大抵國家は將を無事の日に擇み將を有事の際に任す之れを擇むや精を貴び之れを任ずるや專ら貴ぶ當時慶尙道の水將は則ち朴泓元均陸將は則ち李班曹大坤なく已に才なくして選あり變生するに及び巡邊使防禦使助防將等皆朝廷より命を受けて來り各々專斷の權を持し自ら號令を行ひ進退意に由つて相統屬せず正に與尸の戒を犯す事何に由つてか濟るを得ん且養ふ所は用ゆる所に非ず用ゆる所は養ふ所にあらず將卒互に相知らず之れ皆兵家の大忌奈何んぞ前車の既に覆て後に改むることを知らず今に至つて尙此の塗轍に循ふこと此の如にして其



の事を望むものは理に於て合はず之れを言はんにはその說甚だ長くして一二の盡すべきにあらず嗚呼悲いかな

癸巳正月天兵平壤を發す今軍前にあつて先行す時に臨津氷泮つて渡るべからず提督連りに人をして督して浮橋を造らしむ余金郊驛に至り黃海道の守令吏民を率きて大軍を候俱するを見て余牛峯縣の令李希愿を召して率ゆる所の邑人幾何なるかを問ふ數日に近しと曰く余分け付して曰く爾速かに邑人を領して以て登り葛を採り明日余に臨津江に會せよ期を失すべからずと希愿去る翌日余開城府に宿す又明日の曉馳せて德津堂に至り江氷を見るに未猶だ盡く舡けず氷上の流渺半身在り下流の舟艦上ることを得ず京畿の巡察使權徵水使李蘋長瑞府韓德遠及び倡義秋義軍千餘人江面に集り皆手を束ねて計ることなし余令して牛峯の人を呼ひ葛網を納めて巨索となし大さ數圍長さ江に橫ふ江の南北峯各々兩柱を立て相對し其內に一橫木を偃せ置て巨索十五條を引き江南に鋪き過ごして兩頭に橫木を結び江面既に濶遠にして索半は水に沈み起つこと能は

ず衆の曰く徒に人力を費すと余千餘人を令して各々短杠の二三尺なるを持ちて葛索を穿て極力回轉す數周にして互に相撑起し排比すること櫛の如し是に於て衆索緊束して高く穹穴隆を起し儼然として橋樣を成す細柳を刈つて其の上に鋪き厚く覆ふに草を以てし之れに土を加ふ唐軍之れを見て大に喜ぶ皆鞭を揚げ馬を驅つて過ぐ抱車軍器皆此むより渡る既にして渡るもの益々多し絞索頗る緩み水に近きしが大軍淺灘より渡るを以て責むるなし、余念ふに其時倉卒に葛を備ふる多からず更に之れに倍して三十條を得るときは則ち益々緊まりて緩むことなからしと、後に南北史を見るに奔の兵梁王蹕を攻む蹕周の惣管陸騰と之れを拒く周人峽江の南岸にあり安蜀城を築き横に大索を江上に引き葦を編て橋となし以て軍糧を渡す正に是れ此の法は余が自ら偶々思ひ得たる所として古人の已に行ふことを知らさりしものなり、余一笑す因てその事を記して他日應さに猝かに事の起る時に際して助けとなすなり

癸巳の夏余病にて漢城の墨寺洞に臥す一日天將の駱尙者余を臥床に訪



ひ病を問ふこと甚だ勤めたり因て曰く朝鮮方に微弱にして賊猶境上にあり兵を錬り敵を禦くこと最も急務となす宜しく天兵未だ廻らざるに乘し兵法を習錬することを學ひ一を以て十を敵へ十を以て百を敵ふるときは則ち數年の間にして皆精錬の卒となり以て國を守るへしと余その言に感し即ち馳せて行在に啓す因て帶ぶる所の禁軍韓士立をして京中を招募して七十餘人を得て駱公の處に往て教を請はしむ駱帳下の陣法を曉にする張六三等十人を撥して教師となし日夜槍劒箠筅等の技を錬習す既にして余南方に下るのときそのこと稍や廢る、上狀啓を見て備邊司に下して別に諸監を設け訓錬せしむ尹斗壽を以て其の事を領せしむその年九月余南より召されて行在に赴き海州に駕を迎へて扈從して都に還る延命に至る更に余に命して代て都監の事を領せしむ時に都城饑ゆること甚し余請ふて龍山の倉唐粟米一千石を發して日に人毎に二升を給す募に應ずる者四方より集る都監の堂上趙儆穀少くして給する能はざることを以て法を設けて箠を限らんとし一巨石を置て募りに應せんことを願ふものは先づ石を

舉げて力を試みし爲め又土塀の丈余なるを超越せしむ、能くする者は入るを許し能くせざるものは之れを拒く人飢困して氣無く合格する者十に一二或は都監の門外に在つて試みんことを求めて得ず顚倒して死す合格者も未だ久しからずして數百千人を得たり把總哨官を立てゝ部を分つて之れを領し又鳥銃を教ふることを欲して火藥なし軍器等匠人大禮孫と云ふ者あり賊陣に入つて多く火藥を煮て賊に與ふるを以て江華に囚へて將に之れを殺さんとす余將にその死を貸して焰　を煮て罪を贖はしむその人感懼して之れが爲に力を盡し一日煮る所幾十斤日を逐ふて諸各部に分ち晝夜習放その能否を第して之れを賞罰す、月餘にして能く飛鳥を射て中る數月にして後降倭及び南兵の鳥銃を善くする者と相較ふるに及ばざることなく或は寧ろ之れに過ぐ、余上箚して軍糧を措置し益々兵を募り一萬に滿ちて五營を置き營毎に各々二千を隷し毎年半は城中に留めて教錬し半は城外に出てゝ閑曠肥饒の地を選んで屯田して粟を積む輸運遞代するときは則ち數年の後は兵食の源厚うして根本固からんと云ふ、上その議を兵



曹に下す、されとも卽刻に擧行せざるが故に卒に見效なかりしなり

沈惟敬は平壤より賊中に出入す勞苦なくんばあらず然れとも講和を以て名となすが故に我國人に喜ばれず最後に賊釜山に留つて久しく海を渡らず李冊使逃れて還る中朝沈惟敬を以て副使に充て楊使と倭國に入る終に要領を得ずして回る行長淸正等還て海上に屯す是に於て中國と我國と論議錯々として皆咎を惟敬に歸して甚しきは或は惟敬の賊と謀を同して叛かんとすと言す我國の僧人松雲西生浦に入つて淸正に見て還り賊大明を犯さんと言ふ所甚だ悖れり卽ち具に天朝に奏す聞者益々怒る惟敬禍を知つて憂懼出づる所を知らば乃ち書を金命元に貽つて其の始終を陳へ以て自ら辨ずその書に曰く日月倏ち馳せ、往事は昨の如し憶ふに昔倭の貴境に寇して直に平壤に至り日中已に八道なし老朽命を銜んで倭情を哨探し機を相つて撫馭し足下暨ひ李體察と援攘の中に相得たり平壤迤西の一帶を目擊するに居民流離愁苦して針毡に座るが如し朝に夕を謀らざるの狀殊に痛心すべし足下身その事を歷て老朽の喋々たる者を待たず老朽微

して行長を召し乾伏山に相會して西に浸さしめざることを約し命を聽して敢て踰越するなき者數月、延て大兵の至るに及んで平壤の勝を致す設し或は彼の時老朽來らず倭祖公の敗れに乘して走らば義州未だ知るべからず平壤の一道の民々その荼毒を被らざるものは貴國の幸大なるはなし既にして倭將行長退いて王京を守り總兵秀家付將戚長盛等三十餘將兵を合せ營を連ね險を控へ要を扼し罕として破るべからず碧蹄の戰後最も進んで取り難し彼の時判書李德馨は老朽と開城に謁見して將に謂へらく賊務既に張り大兵且退く王京必す望むべきなしと涕泣して老朽に語つて王京は根本の地之れを得て以て諸道を號召すべし乃ち今事勢此に至る將之れを奈何せんと言ふ老朽は從に王京を復すも漢江以南の諸道なくんば事勢亦展布し難しと云ふ德馨は苟も一京に得ば實に塁外に出つ漢江以南の小邦君臣自ら能く尺寸支撐すること難からずと云ふ老朽は我れ試に爾が國と之れを圖つて務て王京を得並せて漢江以南諸道を復し及び王子倍臣を還し方さに圖を全うせんと云ふ德馨涕泣し叩頭して感激し果して此く如



んば天朝更に大兵を發して已に西海より來り忠淸道を出で汝が歸路を斷つ此の時去らんと欲するも得べからず我平壤より汝と情熟す故に言はんに忍びざるのみと是に於て行長懼れて遂に城を出づと云ふ、此の事沈惟敬自ら金右相命元に言つて而して金相余に之れを傳ふること此の如し

懲毖錄大尾

元祿八亥年正月　日

京二條通

大和屋伊兵工寫板

續日韓古蹟附錄終

明治四十三年四月五日印刷
明治四十三年四月八日發行
明治四十三年七月廿九日再版
明治四十四年七月十三日三版

定價金一圓四十錢

著作者　奥田直毅

發行者　京城本町三丁目四十番地
森山美夫

印刷者　京城明治町三丁目
山口竹二郎

印刷所　京城明治町三丁目
日韓印刷株式會社

發兌元　京城本町二丁目五番
電話百四十五番
振替口座百十五番
日韓書房

不許複製

朝鮮土地調査會編

# 最新 朝鮮大地圖

折圖（定價金四十錢 郵稅金四錢）
軸製（定價金壹圓 郵稅金十二錢）

重要作物收穫高比較表……詳細各道別

明治四十二年輸出重要鑛物價格比較表

●國界●道界●首府●道廳所在地●府●郡、邑、鎮、浦、洞、里●鐵道及停車場●鐵道未成線●輕便鐵道●公衆電報取扱停車場●隨時下車驛●哩數●大道●中道●小道●山脈●河川●溫泉●鑛山●燈臺●港口●航路●海底電線●製鹽地●金鑛●銀鑛●銅鑛●鐵鑛●鉛鑛●滿俺●亞鉛●水銀●黑鉛●石炭●砂金●砂鐵●一月等壓線(吋)●八月等壓線(吋)●八月等溫泉●一月等溫泉●一月水溫●八月水溫●水深●電信線●市外電話線●郵便線路●里町間●警務部●警察署●憲兵分隊(警察事務取扱)●高等法院●控訴院●地方裁判所同支部●區裁判所●財務監督局●財務署●林業事務所●勸業模範場●觀測所及測候所●營林廠●農林學校●種苗場●稅關及同出張所同支署●政府倉庫●通信管理局●郵便局●郵便取扱所●郵便所(電報取扱)●郵便所●郵遞所●郵便受渡所●國庫金事務取扱所●電話交換及通話取扱●電話通話取扱所商業會議所●水產組合同出張所同支部●韓國銀行(同出張所)●韓國銀行本金庫事務取扱所●大谷派本願寺朝鮮開敎所●大阪商船會社朝鮮出張及取扱店●他各官衙所在地、常潮、滿潮、干潮

毎日申報社長 鄭雲復著（訂正改版）

## 韓日英新會話

洋裝上製金文字入
定價金壹圓
郵稅金十錢

日韓會話書多く出版されしと雖も完全なるものを見ず本書は故大家博言博士イーストレーキ先生の原案に習ひ編纂せしものなり。加ふるに著者鄭氏は十數年米國及日本に遊び兩國語に通ぜし人にして發音の正確なるは云ふに不及題目の如く韓日英三箇國對照せるを以て單に韓英を學ぶ者のみならず英語を學ぶにも獨學者に簡易明瞭にして解り易き事本書の右に出ずるものなし

毎日申報社長 鄭雲復著

## 獨習 日韓尺牘

洋裝紙數五百餘頁
定價金壹圓
郵稅金十二錢

日韓併合の今日何業たるを不問共同一致を以て萬事を處理せざるべからず此時に當り鮮人に對する言語は勿論書翰の往復を知らざる時は不測の不利益を生じ不便を感ずる事枚擧に暇あらず本書は一般の書信文數百題を一々日鮮兩文に對譯し加ふるに熟語類語等數萬言を上欄に附しあれば應用自在にして日鮮人の一日も座右を離すべからざる良書なり

前李總理秘書官
上邨正巳著
宮內府藏品
日韓書房編輯部編纂

## 京城案內記

定價金三十錢
郵稅金四錢

朝鮮國寶大觀

定價金參圓
正價金二十錢
郵稅金二十錢

朝鮮風俗風景寫眞帖

全五冊
定價金各二十錢
郵稅金二錢

高尚優美韓國寫眞帖

全二冊
特價各金五十錢
郵稅金各四錢

日韓書房編輯部編纂

朝鮮土地調査會編

朝鮮土地調査會編

最新朝鮮大地圖

軸、製
定價金一圓
郵稅金十錢

最新實測踏査朝鮮全圖

折本
定價金四十錢
郵稅金四錢

日韓書房編輯部編纂

京城市街全圖

定價金十五錢
郵稅金二錢

日韓書房編輯部編纂

朝鮮風俗繪葉書

十二枚綴
定價金二十五錢
郵稅金二錢

日韓書房編輯部編纂

朝鮮風景繪葉書

十二枚綴
特價金七圓五十錢
郵稅金三十五錢

國書刊行會編纂

高麗史

全三冊
特價金八十錢
郵稅金八錢

文學博士
帥原坦著

韓國政爭誌

定價金六十五錢
郵稅金八錢

京城通信社長
宇城天

新地誌

定價金三十五錢
郵稅金六錢

宮都高三郎著

職員錄

朝鮮總督府編

日韓瓦斯會社專務取締役
獨逸ドクトル岡崎道光著

法學博士 松井茂 山道襄一 共著

中野警務官校閲
田口春二郎著

朝鮮雜誌社編纂

大邱民長菊池謙讓著

度支部官房編纂

漢城高等學校學監
文學士高橋亨著

京城日報記者
奥田鯨洋著

京城日報記者
奥田鯨洋著

薄田斬雲
烏越靜岐共著

法學士
原田豐次郎著

菊池謙讓
細井肇著閲

警視今村鞆校閲
細谷淺吉著

朝鮮 **金融及産業政策** 定價金一圓 郵税金十錢

**朝鮮半島一班** 定價金一圓五十錢 郵税金十四錢

最新 **朝鮮要覽** 定價金一圓十二錢 郵税金十錢

改訂最近 **朝鮮** 定價金一圓 郵税金十錢

朝鮮最近外交史 **大院君傳** 附王妃の一生 定價金一圓五十錢 郵税金十四錢

現行 **韓國法典** 定價金七圓 郵税金四十錢

**朝鮮の物語集** 附俚諺 定價金一圓 郵税金十錢

**日韓古蹟** 定價金四十錢 郵税金六錢

**續日韓古蹟** 定價金八十錢 郵税金十錢

**朝鮮漫畫** 定價金四十錢 郵税金四錢

**伊藤公と韓國** 定價金五十錢 郵税金四錢

**漢城の風雲と名士** 定價金八十錢 郵税金八錢

**朝鮮巡査** 志願者必携 定價金三十五錢 郵税金四錢

Ⓜ

001982-000-0

210.497-0588|n(3)

日韓古蹟

奥田　直毅（鯨洋）／著

M44

ACB-5062

中國資料